2024 年度

チャペル講話集

関西学院大学社会学部

2024 年度　社会学部チャペルアワー
月ごとのテーマ

春学期

４月　関西学院の心
５月　大学とはどんなところか
６月　I Have a Dream
７月　山上の説教から

秋学期

10 月　コミュニケーション―「伝える」ということ
11 月　「違い」に向き合う
12 月　クリスマスを前にして
１月　新年を迎えて

2024 年度　チャペル講話集目次

Ⅰ．大学とはどんなところか

「大学とはどんなところか」という問い ……今井　信雄…　7
ベラー先生から学んだこと ……奥村　　隆…　10
意図せず生じた結果に出会う時間とその価値 ……佐藤　哲彦…　14
イデのはなし ……中野　康人…　18

Ⅱ．I Have a Dream

夢を語ること ……渡邊　　勉…　23
「違和感」という宝 ……打樋　啓史…　27
地域と「ついで」につながる社会 ……大岡　栄美…　32

Ⅲ．コミュニケーション－「伝える」ということ

はじめにコンテンツありき ……難波　功士…　39
バベルの塔と翻訳の課題
　――コミュニケーション・伝えることを考える――
……Hans Peter Liederbach…　43
異文化・異言語・先行研究・一般常識との「会話」 ……西村　正男…　46
学問の「面白さ」を考える ……石田　　淳…　49
時間をかけて，ゆっくりと ……松宮　園子…　52

Ⅳ．「違い」に向き合う

違いが生み出す差別・分断 ……中谷　文美…　57
違いと「育ち合い」 ……Timothy O. Benedict…　61
Making a Positive Difference in the World …Vivian Bussinguer-Khavari…　64
性の「違い」のリアリティを知り，排除にあらがう ……武内今日子…　67
「違う」被災者の「普通」の暮らしを支援する大学生 ……関　　嘉寛…　70
共生を考える ……貴戸　理恵…　73
他人の心の読み違え ……岩谷　舟真…　76
向き合うべき「違い」は（それほど）ない ……安達　智史…　79
自分自身の嫉妬心に向き合う ……鈴木慎一郎…　82

Ⅴ．定年退職者による最終チャペル講話

私の研究の根底にあるもの：人間とは何か？ ……野瀬　正治… 87
モンパルナスの日々－4 人の女性たちの思い出 ……荻野　昌弘… 90
学びの在り方について ……吉田　寿夫… 93
チャペル講話を語る意義とは－最終講話で考えたこと ……三浦耕吉郎… 97

Ⅵ．学年度末にあたって

時間のはなし ……島村　恭則…103

Ⅰ．大学とはどんなところか

2024. 5. 16（木）

「大学とはどんなところか」という問い

今 井 信 雄

「大学とはどんなところか」というお題をいただきました．今日，何を話すとよいのかと思い，法律ではどのようになっているか調べてみました．教育基本法という法律では，「大学は学術の中心として高い教養と専門的能力を培うとともに，深く真理を探究して新たな知見を創造し，これらの成果を広く社会に提供することにより社会の発展に寄与するものとする」とありました．これだけで良いとも思ったのですが，すぐに終わってしまうので少し考えました．

私は法律の話をするように言われているのではありません．関西学院大学の「社会学部」のチャペルという場で，学部生の皆さんに話すことを求められています．ここで私は気付きました．「大学とはどんなところか」という問いは，どこかの「社会」の中で発せられます．「社会」つまり「どこで，誰に，どういうふうに話をするのか」という前提があり，その前提によって問いの意味が変わってくるのです．

前任校での経験から

私は，関西学院大学に来る前は地方の公立大学で教員をしていました．その大学で教員は，日頃からつねに「地域貢献が必要」と言われていました．もしそのとき，「大学とはどんなところか」と話す必要があるなら，「大学とは地域の発展に寄与するもの」という答えになっていたと思います．その大学では，実際に学生がいろいろなゼミで地域のボランティア活動をしたり，多くの教員が地元のさまざまな自治体の委員になったりしていました．もちろん関西学院大学でも地域貢献はしておりボランティア活動も盛んです．しかし，関西学院大学の学生を前に「大学とはどんなところか」という話をする時に，おそらく「まず地域貢献をすべきだ」という話にはなりません．

政治家や産業界の偉い人に向けて，「大学とはどんなところか」という話をする場合はいかがでしょうか．そのような人たちは，もしかすると今の大学に対して不満を持っていて，少しも役に立っていないと思っているかもしれません．インターネットで検索すると，企業が大学に求める力は課題解決という記事が大量に出てきました．大学は学生に課題解決力を身に付けさせるべきと思っているかもしれません．その場合は，「大学は課題解決力をこのように身につけさせている」という話になっていたかもしれません．

つまり，問いはその「前提」によって意味自体が変わってきます．そうすると，答えも

いろいろと変わってくるのです．最近は，「…とは？」という問いの立て方をすることが増えているようです．インターネット上の記事やテレビ番組でも，「…とは？」という表現がよく使われています．「とは」の後にクエスチョンマークが付いています．つまり，「とは？」は「とは何か？」の略です．

私のゼミ生がゼミで研究発表する時も，発表タイトルに「…とは？」と付けている場合がよくあります．たとえば「ジェンダー平等を実現するための社会のあり方とは？」や，「観光客と地域住民が共存する方法とは？」のようなタイトルです．しかし，「とは」という問い自体には前提が示されていません．突然「とは」と問いを発すると，どのようにでも答えられます．逆に，どのようにも答えられないとも言えます．

前提のない「問い」

「チコちゃんに叱られる！」という NHK の番組があります．皆さんもご存じと思います．チコちゃんが「何で？」と聞いて，出演者が間違ったことを言うと，「ぼーっと生きてんじゃねえよ」と叱られる演出です．しかし，前提のない「何で？」は，前提のない「とは？」と同じく，どのようにも答えることができて，どのように答えても「間違いだ」と指摘される可能性があります．

例えば先週の放送は，「年を取ると老化するのはなぜ」という内容だったようです．番組の答えとしては，まずは生物学的に細胞分裂の回数に限りがあることを説明します．その上で，細胞分裂の回数の制限を「回数券」という言葉に置き換えて，「命の回数券が減っていくから」という「答え」を用意していたようです．回数券という比喩を用いない場合，年を取ると老化する理由は，「細胞分裂の回数に限りがあるから」が答えになります．

しかしこの答えが成立するためには，問いに「生物学的に」という前提がなければ正解とはならなくて，たどり着かないわけです．前提がない限り，問いの意味は成立していません．「年を取ると老化するのはなぜ」という前提のない問いに対しては，どのような答えもあり得るのです．「老化しないなら人が死ななくなって，命の重さを考えなくなるから」という言い方でも良いのです．「年を取ると老化するのはなぜ？そんなのは当たり前でしょう」と答えてもよいわけです．アニメ「鬼滅の刃」の煉獄さんも，この問いに答えを出しているようです．「老いることも死ぬことも，人間というはかない生き物の美しさだ」，「老いるからこそ，死ぬからこそたまらなくいとおしく尊いのだ」と言っています．煉獄さんは良いことを言います．このような答えでもよいのです．

子どもが親に「何で？」と聞いた時は，前提がないためどのようにでも答えることができます．ある意味，都合が良い問いなのです．本来，その問いに意味を持たせるためには前提が必要です．

「さおだけ屋はなぜ潰れないのか？」という問い

以前，『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』という本がベストセラーになったことがあります．この本は 2005 年に出版されました．「さおだけ」は物干し竿のことです．「さおだけ，さおだけ，2 本で 1,000 円」と言

いながら車で売りに来ます．なぜその商売が成り立っているのかという本です．

その本の答えとしては，「買いに来た人にいろいろな話をして家の修繕が必要だと思わせ，その修繕も一緒に行うという商売をしているから」や，「竿だけ以外のほかのものも一緒に売るから」となっています．この本が売れたことで，その後に，「○○はなぜ○○なのか」というタイトルの本がやたらと出版されました．この問いは，前提もなく突然発せられたという意味ではどのようにでも答えることができます．この本には「会計学」というサブタイトルが付いています．一応，前提は付いている，と言ってよいかもしれません．

いずれにしても，突然「○○はなぜ○○なのか」というタイトルがあったならば，どのようにでも答えられるのです．その問いをあえて立てて，答えに意外性を持たせて楽しむ戦略です．それはチコちゃんの番組や，今テレビでいろいろとある「何々とは」で採用されている戦略だと思います．しかし，本来は前提がなければ問いは意味を持ちません．

前提が変われば問いの意味も変わる

『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』は20年ほど前の本なので，今はさおだけ屋がどのようになっているか検索してみました．ある自治体のホームページで，「物干し竿の移動販売にご注意ください」という情報が出てきました．その情報によると，「2本で1,000円」と言って移動販売をしているそうです．住民が「さお竹を2本下さい」と声を掛けると，すぐに別のさお竹を切って4万円請求されます．「2本で1,000円じゃないのか」と聞くと，「こっちのさおはステンレスでもっと高いやつだ」，「あなたが『下さい』と言ったからもう切った」と言われます．悪徳業者側は，「売ってくださいと言われて売っただけ」，「だから買え」という理屈です．

訪問販売はクーリングオフという制度があります．「買います」と言ってお金を払っても，一定期間であれば契約を破棄することができます．しかし，この場合は住民から声を掛けているため成り立たないのではないか，という議論もあるそうです．興味がある人は調べてください．しかし，そうすると現代であれば，『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』の問いに対しては，「悪質商法だから」ということになってしまいます．もちろんこのような悪質商法ばかりではなくて，良心的な販売をしているさおだけ屋もあるとは思いますが．

私は関西学院大学の皆さんに，「大学とはどんなところか」という問いに対する答えではなく，問いそのものに対していろいろと話をしました．つまり，「大学とはどんなところか」という問いの答えとしては，「大学とはいろいろなことを調べて考えて，さまざまな話をする場」と受け取っていただければと思います．もちろん大学以外でもできると思いますが，大学はそのようなことをしやすい環境なのです．いろいろなことを考えて話をしている人が周りに大勢います．そのような場にいることを知っていただければと思います．

（社会学部教授）

2024. 5. 23（木）

ベラー先生から学んだこと

奥　村　　隆

ロバート・ベラーとの出会い

今月の社会学部チャペルアワーのテーマは「大学とはどんなところか」です．このテーマをお知らせいただいたとき，私はすぐにある先生の話をしようと思い立ちました．アメリカの宗教社会学者ロバート・ベラー（Robert Neelly Bellah）先生のことです．

私がベラー先生にお会いしたのは，2012 年秋のことでした．もう 12 年も前ですね．当時私は東京の立教大学に勤めていましたが，佐藤秀夫さんという卒業生の方がベラー先生を東京にお呼びして講演会を開催したいと大学に働きかけていて，私がそのオーガナイザーをすることになったのです．ベラー先生は 1927 年生まれで，カリフォルニア大学バークレー校に長く在籍され，日本の近代化の宗教的起源を解明しようとした『徳川時代の宗教』（1957 年，岩波文庫）で有名な，社会学史の教科書にも出てくるような社会学者です．私は来日まで交渉の窓口で，そのような先生とメールをやりとりするのはとても不思議な感覚でしたが，ベラー先生は率直にものをいう方で，成田空港ではじめてお会いしたときはずいぶん距離が近くなっているように感じました．

ベラー先生は当時 85 歳でしたが，東京滞在中に 3 つの講演と 1 つのシンポジウムを行い，エネルギーに溢れている印象でした．それまで私は過去の宗教を研究する宗教社会学者としてしか知らなかったのですが，講演の内容もご一緒したときの会話でも，現代社会への批判，とくにアメリカ社会への厳しい批判をはっきりと発言されていて，私は少し驚きました．

その批判精神はなにに由来するのか．ベラー先生ご自身や関係者の話を聞き，帰国後にその作品を読んでみて，ベラー先生の学生時代の経験のことを知りました．ベラー先生は高校生時代からマルクス主義の文献を読み始め，ハーバード大学進学後はアメリカ共産党の学生支部のメンバーだったそうです．第二次世界大戦後，ベラー先生はマルクス主義の幻想から醒め，師であるタルコット・パーソンズからヴェーバーやデュルケームの社会学を教えられて「鍛えられたリベラリズム」を手に入れたというのですが，1950 年代，マッカーシズムが大学に押し寄せます．

マッカーシズムと「亡命」

マッカーシズムとは，1950 年 2 月に上院議員ジョゼフ・マッカーシーがアメリカのあらゆる分野に共産主義者が潜んでいると騒

ぎ立て，FBI や議会の「非米活動委員会」が共産主義者やそのシンパを摘発・排除していった，いわゆる「赤狩り」です．ベラー先生は，ハーバードの学部長に一緒に活動していた仲間の名前を明かすよう，奨学金打ち切りや博士論文終了後の就職を材料に迫られます．そこで名前を明かせば，「普通のアメリカ人」に戻ることができた．でも彼は誰の名を明かすことも拒んだため，ハーバードで研究が続けられなくなり，カナダのマギル大学に移って 2 年間過ごすことになります．マッカーシーの死によって赤狩りの嵐が去り，ベラー先生は 1957 年にハーバードに戻りますが，そのあいだ「祖国から亡命し，希望を見出せる場所がない」状態に置かれた，といいます．

私はこのことを知って，歴史上の遠い出来事と思っていたマッカーシズム，つまり国家がある思想をもった人々を排除する動きに，直接お会いしたベラー先生が翻弄されたという事実に，率直に驚きました．学部長が「仲間の名を明かせ」と大学院生に迫ってくる．大学という場所で，そういうことが起きることがあるんだ．そういう力が大学のなかにぐいっと入り込んできて，人々を飲み込むことがあるんだ．逆に言えば，大学という場所はそうした力とつねに緊張関係にあって，それを押し返し続けることで「自由」を守り続けているんだ．

ベラー先生とじっさいにご一緒したのは 1 週間ほどの短い時間でしたが，ひとつひとつのお話に，ああ「精神の自由」がここにある，と感じました．その後，講演やシンポの記録を本に編集する仕事をしていたのですが（ロバート・N・ベラー，島薗進，奥村隆編『宗教とグローバル市民社会――ロバート・ベラーとの対話』2014 年，岩波書店），序文を送ってくださった直後，先生は心臓手術のあと容態が急変して亡くなってしまいました．2013 年 7 月 30 日，86 歳でのご逝去でした．

戦時下のキリスト教主義大学

ベラー先生が立教大学の招聘に応じられたのは，卒業生の佐藤さんがバークレーの大学院修士課程でベラー先生に指導を受け，ぜひお呼びしたいと動かれたことが最大の理由ですが，ベラー先生が聖公会の熱心な信者だったことにもよると思います．先生はプロテスタントの一派・長老派の家庭に育ちましたが，1970 年代にふたりのお嬢さんを相次いで亡くされて，それをきっかけに聖公会に改宗しました．聖公会はイギリス国教会に端を発する宗派で，アメリカ聖公会の宣教師たちが立教大学の元となる学校を創設しましたので，宗教的にご縁があったわけです．

私は立教大学で 14 年間教え，関西学院に来て 8 年目で，もう 20 年以上キリスト教主義の大学に勤めていることになります．そして，さきほどのベラー先生の経験と同じような経験を，日本のキリスト教主義の大学がくぐり抜けてきたことは，忘れてはならないことのように思っています．第二次世界大戦中の国家と大学の関係です．ベラー先生との出会いのあと，気になってある時期に少し勉強してみたのですが，『立教大学の歴史』（立教大学立教学院史資料センター）というよくまとまった本がありますので，他大学の例ですが，立教のことを少しお話してみますね．

立教は創立以来アメリカ聖公会との深い関係をもってきましたが，1940 年 10 月，

学校長，学部長，理事長はすべて日本人，理事の過半数を日本人とする規則変更を行い，日米関係が悪化した 1941 年８月にはアメリカ人宣教師など立教にかかわっていた外国人は１人を除いて全員日本を離れ，アメリカ聖公会との関係は完全になくなります．そうしたなか，文部省は「立教学院寄附行為」にある「基督教主義ニヨル教育ヲ行フヲ目的」とするという文言を修正するよう，1941 年６月，12 月の２回にわたって迫ってきます．これに対して，立教は「外国関係ヲ断チタル上根本的ニ改正ヲ行フ」と回答し，1942 年９月に次のふたつの決定をします．ひとつは，従来「基督教主義ニヨル教育」としてきた学院の目的を「皇国ノ道ニヨル教育」，つまり天皇のための教育勅語による教育を行うことに改めるのです．そして，「本学の教育方針をさらに明確に」するため，チャペルを閉鎖することを決定します．

「キリスト教主義の教育」を捨て，「皇国の道の教育」に転じて，チャペルを閉鎖する．『立教大学の歴史』はこれを「立教学院が生き残りをかけて選択した結果」だと述べながら，同じ状況に置かれた他のミッションスクールの事例と比較して，「立教学院がキリスト教主義教育を維持することや『皇国の道』を採用しないという選択も可能であったことがわかる」と記しています．戦局が悪化するなか，キャンパスは荒廃し，空襲から逃れるために防空壕を作るさい，その蓋にする資材が不足していたため，チャペルの椅子がそれに充てられ，チャペルは非常用食料保管所として使用されることになります．また配属将校の反キリスト教的言動が広がるなか，詳細は不明ですが，チャペルの祭壇の一部が毀損されました．

「精神の自由」と大学

敗戦後の 1945 年 10 月，GHQ の視察を受けた立教学院は，礼拝堂の無残な状況を厳しく批判され，「キリスト教主義の教育」を放棄したことなどを理由に当時の学院幹部が追放されることになります．追放指令を受けて，学院は 10 月末と 11 月の理事会で，チャペルを速やかに再開すること，「寄附行為」の目的を「皇国の道教育」から「キリスト教主義教育」に改めることを決定します．「キリスト教主義教育」の再建が，立教の戦後の第一の課題だったのです．

みなさんはこれを聞いてどう思うでしょうか．大学人として胸が苦しくなるような歴史です．外部からの圧力を前に，自分たちの判断で，こうした決定をしてしまった．ただ，私は今回久しぶりに『立教大学の歴史』を読んで，2007 年刊行の本が自校の苦い過去を目をそらさずに見つめて，率直に記していることに深い感銘を受けました．そして，戦後立教大学はこの経験の反省のうえに平和教育を進め，チャペルは多くの人々の努力によって復活して，現在もじつに美しい姿を保っています．

では関西学院はどうだったのか．これは，私よりもずっとよくご存じの先生方が多くいらっしゃいますし，むしろみなさん自身に調べていただくのがよいのでしょう．

「真理はあなたたちを自由にする」という聖書の言葉があります（これは社会学部のモットーで，チャペルにも掲げられていますね）．大学とは，真理による自由，「精神の自由」をはぐくむ場所だと思います．きょうお伝えしたかったのは，それはいつも外からの力にさらされていて，それを押し返し続ける

努力なしには簡単に壊れてしまうかもしれない，ということです．そしてもうひとつ，私は立教大学という場所があったからベラー先生に出会えたわけですが，大学はそのような素晴らしい「精神の自由」の持ち主と出会う機会を与えてくれる場所だということです．

（社会学部教授）

2024. 5. 29（水）

意図せず生じた結果に出会う時間とその価値

佐　藤　哲　彦

はじめに

私のことを知っている人はそれほど多くないと思いますが，いま打樋先生が紹介してくださったとおり，私の専門は社会問題論や医療社会学です．具体的には，ドラッグや薬害について研究しています．要するに薬のことを研究しているわけです．一方で，違法薬物の覚醒剤や大麻などの研究で，それらを使っている人たちに会ってインタビューなどをしてきました．もう一方で，医薬品の健康被害について，サリドマイド薬害や薬害エイズなどの健康被害に遭った人たちと一緒に研究をしてきました．

恐らく日本でこのような薬の研究を社会学で行っているのは私だけです．世界的に見てもいません．私がこういう，他の人がやらない研究を行っている理由が「大学とはどんなところか」という今日のテーマと少し関係していると思いますので，そのような話をしたいと思います．

機能という考え方のユニークさ

今日は授業ではありませんが，すでに習慣になっているために，社会学者らしく，社会学の概念の説明からしたいと思います．機能という言葉は分かりますか？社会学では非常に大事な考え方で，「Function」という言葉です．実は機能という言葉には，日常的な使い方とは少し異なった非常にユニークな考え方があります．日常的には「機械が機能している」というような使い方をしますが，社会学での使い方は非常に特徴的です．私たちは何かをする時には，目的や動機などを非常に大事に考える習慣を持っています．実際，中等教育まではそのように教育されてきたと思います．しかし，機能はそのようなこととは少し違います．

社会学的には，機能とは「結果から見るシステムの調整」です．結果が重要なのです．少し難しい考え方ですが，具体的に言うと分かりやすくなるでしょう．朝から恐縮ですけれども，例えばお葬式に行く場合です．われわれは，亡くなった人を弔って，その人をしのぶ目的や動機でお葬式に行きます．しかし，例えばお葬式に参加して親族が集まると，久しぶりに会うためお互いに近況報告をしたり，いろいろ話したりします．そこで結果的には，親族との絆が深まるなど，当初は意図していなかった結果が生じることがあります．

教会での祈りも，そのような部分があるかもしれません．つまり，神様に祈りを捧げに

行って救済や一日の平安を願います．しかし結果的に，例えば信者同士が集まって，心の平安や救済を得るということが生じます．集まるということがもたらす結果です．それは意図や目的や動機などとは別で，極めて社会的な現象です．このようなことを，社会学では「機能」と呼びます．今回はそれが大事という話をしたいと思っています．つまり，意図せず行ったことで生じる結果もまた大事だという話です．

特に最近では，大学が「目的を持って勉強しなさい」などと言います．さらに現実的に言うと，例えば皆さんは，就職活動のためにいろいろな資格を取り，単位を集めます．就職活動のために良いゼミに入ります．しかし，果たしてそれはいかがなのでしょうか．もちろんそれは良いことなのですが，実は私は「少し違うのでは？」と思っている部分があります．機能とまでは言わないけれども，目的としなくても，結果的に何かが明らかになって生まれるものをもっと大事にしてもよい，と思っているということです．

何かもやもやしたものにしたがうということ

私は大学を出て，実はしばらく企業で働いていました．その後辞めましたが，意に沿わない仕事をしていたわけではありません．大学の時は社会学を専攻して調査することが大好きでした．理論的な勉強をして，それをふまえて調査に行きます．普通の授業ではそのようなことをする必要は全くありませんでしたが，個人的に精神科の診断に興味があるため知り合いのつてで診察を見学させてもらって，その様子を記述したレポートを書いたりしました．また，公園に集まった子どもと母親たちについて，活動の様子を記述したレポートも書いたりしました．どちらも「そうしろ」と言われたのではなくて，「面白そうだな」と思って社会学のいろいろな研究を読んで，それに倣ってレポートを書いてみました．恐らく調べることが好きだったのだと思います．そのため出版社に就職しました．取材をして，原稿を書いて編集します．非常に楽しくて充実した仕事でした．

しかし，言葉にならない「何かもやもやしたもの」がありました．そして，恐らくここにいるとそれをうまく解決できない，と思って会社を辞めました．ただ，これには説明ができない非常に難しい部分があります．

合理的に考えると，間違いなく給料は良くて，名刺を出して取材ができるため，非常に良かった会社生活でした．しかし「何かもやもやしたもの」があって，それに従うことにしました．ある朝，起きた時に「やっぱり辞めよう」と思って辞表を出したのです．

周りも自分さえも驚きましたが，そのようなことが大事だと大学の時に学びました．非常に分かりづらいことだと思いますが，私は大学の時に，自分が気になっていることを大事にして追求していくと，結果的に何かが生まれるという経験をして，そのことの大事さを知っていたのです．あらかじめ目的を持って調べて何かを達成することとは違っていて，極めて偶然性の高いところに身を置くことの大事さです．

それは，例えば「生きづらさ」などという名前が付けられるものではありません．そのような違和感には，いろいろな説明の仕方があるかもしれません．しかし，私のそれは名前のあるものではありません．「何かもやも

やしたもの」であって，自分にしか分からない，言葉にならないさらに小さな何かです．ある種の違和感や，ひらめきのようなものかもしれません．ただしそれほど上等なものではなくて，「何となくこれはちょっと違うんだよな」というような，説明ができない何かです．

そのような「何か」は非常に大事なのですが，ほとんどの人は普段は見ないふりをして抑えています．おそらく，目的に向かって努力するように教え込まれているからでしょう．あるいは人に説明できないために，空気を読んで「なかったこと」にすることが多いかもしれません．特に最近の大学はキャリア教育が盛んで，目的を持って積み上げていくことが求められていると思います．しかし，そのように目的に対して合理的に自分の活動を組織していくという作業は，会社に就職するといやが応でもさせられるものです．会社は利潤を追求するために極めて論理的に，合理的に組み立てられていて，人はそれに対して使える資源を集めて能力を発揮していきます．ある種，非常に合理的な場所で，言ってみれば分かりやすくてやりやすいのです．

しかし，生きることを考えると，それでは足りない感じがします．整序されて目的に向かって論理的に組み立てられている道では，恐らく「足りない何か」や「救えない何か」があるのではないでしょうか．自分にもありますし，皆さんにもあるのではないかと思います．

自分の違和感に意味を与える期間としての大学

恐らく，そのようなものに，自分なりの「名前」や「意味」を与えることができるのが大学です．考えてみると，私たちは小さい頃から目的を持ってその場を過ごすように教育されています．小学校は違いますが，中学に入ると高校受験のために，高校に入ると大学受験のために活動をいろいろと整えて，目的を持って過ごすように教えられてきていると思います．それは極めて合理的な精神です．それは世の中を回していく一つの方法であって，非常に大事です．しかし，皆さんは今せっかく大学という場所に来ていて，さまざまな形でさまざまな人と会う機会もあります．ぜひ，結果が分からない「何か」に言葉を与えて，あるいは気持ちを沿わせてみてほしいと思っています．

私の場合はそのようにしました．だからこそ，他から見るとどう考えても合理的ではない選択をしたのでした．会社を辞めて，しばらくは失業したまま勉強していました．結果的に大学院に進んで研究者になりましたが，最初から研究者になろうと思っていたわけではなくて，会社を辞めた後はしばらくライターの仕事を回してもらっていました．DJみたいなことをしたこともありました．なぜかというと，その時の自分の気持ちに合うことをしようと思っていたためです．

しかし一つ言っておくと，気持ちに沿ったからといって必ずしもうまくいくということはありません．ただ，そのようなことを続けていると，うまくいく感触を得ることができます．それが非常に大事で，そのような感触を育てるのが大学であなたたちに許されている時間だと思います．時間を自分の目的のために費やすのではなくて，今の自分が持っている感触を救ってあげるために，あるいはそれらに「名前」を与えてあげるために使って

ほしいと思います．そのために大学にはいろいろな人がいて，さまざまな支援があります．それほど大きく言われないかもしれないけれども，私はそれが大学の重要な意義だと思っています．

私のメッセージは以上です．それでは良い一日を過ごしてください．

（社会学部教授）

2024. 5. 30（木）

イデのはなし

中　野　康　人

学生時代を思い出して

「大学とはどんなところか」というお題をいただきました．私は 2002 年に関西学院大学に来て，20 年以上働いています．それ以前は別の大学で働いていましたし，さらにそれより前の大学院生や研究員そして皆さんと同じく学部生だった頃も含めると，30 年以上大学にいることになります．「大学とはどんなところか」と聞かれると，ほぼ生活の全てと言ってもよいです．ですから，感覚がずれているかもしれないため，私が皆さんと同じく大学に入りたての頃に何を考えていたかを思い浮かべてみました．先に結論を言うと，大学とは「水路」です．英語では「canal」です．それが今日の話です．

瀬田の上井手・下井手

大学が水路であると思った理由を話します．大学 1 年生の秋学期に人文地理学の講義を受けました．「大学時代の授業を 1 つ思い出せ」と言われた時は，必ずこの講義のことを思い出します．人文地理学では，瀬田という場所の話をしていました．皆さんは，瀬田がどこにあるかご存じですか．関西では，まずは琵琶湖がある大津市の瀬田の唐橋を思い浮かべますよね．しかし，この講義で取り上げられた瀬田は熊本の阿蘇山にあります．阿蘇山は，1 周が約 128 キロメートルある，非常に大きなカルデラです．そこに，1 カ所のみ山が切れて水が流れ出しているところがあります．白川です．阿蘇山の中の地表の水が全てそこから流れ出ていて，流れ出し口の部分が瀬田という場所です．この熊本県菊池郡大津町の瀬田とみなさんが思い浮かべたであろう滋賀県大津市の瀬田は，偶然どちらも水が関係している町の名前です．水が流れ出ている部分を「瀬田」や「瀬戸」と言うため，琵琶湖でも阿蘇でも瀬田という名前がついているのです．

その講義で，瀬田には上井手と下井手があるという話がありました．井手とは水路のことです．阿蘇山の外側には平野があって，少し台地になっている部分があります．また，阿蘇山の辺りは噴火で多数の火砕流があって，土地は非常に凸凹しています．そのため，高い場所に水を流すために水路が作られたわけです．

上井手と下井手は奈良時代からあって，今も残っているものは加藤清正が熊本に入ってきた時に土木工事をして作ったものです．その後は細川の人が整備して，約 300 年間ある水路です．その水路のおかげで標高が高い

場所でも農作物ができて，今も関西に菊池郡のトマトなど，いろいろな作物が来ています．農作物ができるのは，上井手と下井手ができたおかげという話です．

大学で半年間，上井手と下井手の話を毎週聞きました．用水路の話を聞く時間は楽しかったという記憶です．当時の私はほぼ授業に出ない人間でしたが，その授業は毎週きちんと出ていました．最前列に座って，真面目な学生を演じて話を聞いていました．阿蘇から流れ出る白川に堰を作って水を取り，どのように流していくかという技術的な話以上に，長い水路の途中にある村々に水を分配する方法についての話が面白かったです．上流側の水路で水を取ってしまうと，下流の人は水をもらえなくなります．維持していくためにさまざまな調整をして，人々は仕事を割り振って作業をしていました．自然と人とのやりとりに加えて，人同士が協力して働いて水路が成り立っているという話でした．それが非常に面白かったと記憶しています．そのおかげで阿蘇地方や熊本平野は，今も続く農作物の一大穀倉地帯になっています．

身近な水路

私はさまざまな場所で暮らしましたが，行く先々で似たような話がありました．今私たちがいる上ケ原キャンパスでも，同じようなものを見ることができます．西宮で暮らしている方は聞いたことがあるかもしれません．社会学部の周りや図書館の横にも水路が流れています．何も気にしなければただの溝で，おしゃれなオブジェとして水が流れているだけと思ってしまいます．しかし，全てが農業用の用水路なのです．チャペルから左のゲートを出て，左に行って道なりに 150 メートルほど進みます．大学の裏手に出ると，大量の水が流れている水路があります．元をたどると，そちらから分岐して大学のキャンパスの中を通って，その後に上ケ原に水が流れていきます．全て，農業用に水を流しています．

元々は仁川の上流で堰を作って，水を取って流しています．大学は上ケ原一番町で，上ケ原は十番町まであります．水が流れている順番で番地が付けられていると聞いています．いずれにしても何百年も前の上ケ原は，水がないため農作物に全く向いていなかった場所です．しかし，水路を作って流すことによって果樹園や田んぼができました．

水の流れを見ると，人々の暮らしや歴史的な話が出てきます．もし皆さんが別の場所に行った際にそこに水があれば，「この水はどこから来たのだろう」と思っていただきたいです．そうすると，恐らく 1 カ月ほどはそれで暮らせると思います．

水路をつくる

水の話をしていて私が思い出すのは中村哲さんです．私の実家の近所に住んでいました．中村さんは医者で，アフガニスタンで医療支援をしていました．しかし，けがや病気がなくならない理由は人々が貧しいためで，農業をきちんとしなければいけません．そのためには水が必要ということで，最後は長い間，現地で水路を作る仕事をしていました．残念ながら数年前にテロリストに襲われて死んでしまいましたが，彼が水路を作ったおかげで砂漠のような町が豊かな穀倉地帯になりました．彼の話を聞いていると，私も大学を

辞めて，どこかに水路を作りに行きたいと真剣に思うことが度々ありました．しかし，何とか踏みとどまってこちらで仕事をしています．

大学で話をする時に気を付けていることが１つあります．それは，私は新しい何かを生み出せているか，ということです．何か，とは学生の皆さんにとっても私にとっても，そして社会にとっても新しい何か，授業を受けたり研究活動をしたりすることによってそれ以前にはなかった付加価値を生み出すことができるか，ということです．農業を基本とする社会において，農作物という付加価値，新しいものを生み出すには水が必要でした．水路ができることによって，不毛の土地を豊穣な穀倉地帯に変えたのです．今の日本社会は，農業以外の産業が主流になっていますが，第二次産業・第三次産業，皆さんがこの先就職して働くような場所で「水」になるのは大学で身につけ成長させられる知識や技術や能力です．私はデータ分析を担当していますので，皆さんがデータ分析の技術を身につけることによっていきいきと社会で活躍できるようになってほしいと思っています．データ分析の技術が，私から皆さんにお渡しできる「水」なのです．大学は，皆さんが現代社会で生きていくための水を供給する水路であり，この水路を維持して後世に伝えていくのが教員として役割だと考えています．そして学生の皆さんは，この大学でたらふくの水を体に染み込ませて社会に出て活躍していってほしいと思います．

（社会学部教授）

Ⅱ. I Have a Dream

2024. 6. 19（水）

夢を語ること

渡　邊　　勉

子どもの頃の夢を調べてみる

昨年度，私たちのゼミでは子どもの頃の夢に関する調査をおこないました．20 代，30 代の人達 800 人を対象とした調査でした．この調査では，小学生のときから中学生，高校生のときの夢までを，思い出して答えてもらいました．

そもそもこの調査をおこなった動機の一つは，子どもの頃にサッカー選手やお菓子屋さんになりたいと考えていた子どもたちは，その後どうなったのだろうかという素朴な疑問でした．彼ら，彼女らの夢は大人になってから実現したのでしょうか．

実はこの調査には元ネタがあります．第一生命が 1990 年代からおこなっている調査です．メディアでも毎年のように報道されているので，ご存じの方も多いと思います．第一生命では毎年，小学生から高校生までの生徒たちに，大人になったらなりたいものをたずねるという調査をおこなっています．つまり子どもの夢です．2023 年の結果をみると，小学生男子の上位 3 つの仕事は，会社員，Youtuber，サッカー選手でした．そして女子はパティシエ，漫画家，会社員でした．

では今回私たちがおこなった調査ではどうだったのでしょうか．調べてみると，男子がスポーツ選手，先生，電車の運転手，女子ではケーキ屋さん，花屋さん，保育士の順でした．さらに今回の調査対象者が小学生だった 2010 年の第一生命の調査結果と比較してみましょう．結果をみると，小学生男子の上位 3 つの仕事は，サッカー選手，野球選手，学者で，女子が食べ物屋さん，幼稚園の先生，学校の先生の順番でした．似ていることがわかるでしょう．一方高校生になると，様相が変わります．第一生命の調査では 2023 年の男子は会社員，IT エンジニア，公務員，女子は会社員，公務員，看護師となります．

ここで気づくことはないでしょうか．私が気づいたことを 2 つ指摘したいと思います．

子どもの夢とは

一つは，性別によって将来なりたい仕事がずいぶんと異なっているということです．現実の仕事の世界では，性別職域分離といって性別によって就いている職業が異なるということがいわれています．大工や自動車整備工になる女性は少ないし，看護師や保育士をしている男性は少ないのは実感としてわかるかと思います．そして男性が就きやすい職業は

収入も社会的地位も高い傾向があり，女性が就きやすい職業は逆に低い傾向があります．ただ私がここで注目したいのは，小学生のときからそれが内面化されているということです．小学生自身は大人の仕事世界を内面化しているなどとは自覚してはいないでしょう．でも結果をみると，男の子はいわゆる男の子らしい仕事，女の子は女の子らしい仕事を夢として答えています．こうした傾向は，かなり普遍的なもので，ジェンダー平等が進んでいるはずの北欧でも同じ傾向がみられることがわかっています．

ここでいいたいことの一つは，私たちが抱いている将来の夢とは，かなり社会的に埋め込まれているのではないかということです．自分がなりたいと思っている将来も，それは社会，あるいは大人たちによってかなりの程度方向づけされているのではないかということです．子どもたちは大人たちの社会の論理を身につけ，ただなぞっているだけなのではないかとも思えるわけです．そしてそれは性差別を再生産しているのではないかとも言えるのです．夢を持てだなんて，きれい事にすぎないんじゃないかと思えたりします．

もう一つ気づくことは，小学生から高校生にいたる過程の中で夢が現実的なものへと変化していくということです．会社員や公務員になりたいというのは，かなり実現可能な夢だと言えるのではないかと思います．さらに私たちがおこなった調査では具体的な夢を答えた人は，小学生のときで４割に過ぎなかったのですが，高校生になるとさらに減少して１割しかいません．つまり９割の人は高校生のときに夢を持っていないのです．夢なんてどうせ実現できないし，そんなことはきれい事にすぎないと高校生は知ってしまっているのかもしれません．夢は，どうやら大人たちに押しつけられているんじゃないかということ，そして，だからなのか，歳を重ねていくにつれて夢を持たなくなっていくということがわかります．それこそが大人になることなのだと言ってしまうことは簡単かもしれません．夢なんか持ったって仕方がない．でも，本当はそうではない，とどうしたら言えるでしょうか．

夢を語るということ

ここで少し立ち止まって，夢をもつということはどういうことなのかについて，少し考えてみたいと思います．キング牧師の言葉を考えてみます．

今回チャペルで話をするというので，あらためて 1963 年のワシントン DC でのキング牧師の有名な演説を聴いてみました．何度か聴いたことがあるはずですが，やはり心を動かされます．そこにある強い信念と思い，そしてあの時代の熱気を感じることができます．そこにはキング牧師の演説のうまさがあることは確かでしょう．でもそれだけではなく，夢を語ることそのことに，私たちは共感し心を動かされるのではないでしょうか．夢を語るということは，自分たちがまだ達し得ていない理想，それは社会のあるべき理想の姿なのかもしれないし，個人の生き方や仕事における理想なのかもしれませんが，そうした理想を描いているからなのではないかと思います．それは来て欲しいと望む未来についての想像です．

小学生のときの夢が，非常に性別役割的だとしても，子どもたちが楽しそうに自分の夢を話しているのであれば，私たちは応援した

くなるに違いありません．私たちは，まだ見えない未来についての理想を語るとき，その姿に心を動かされるのだと思います．キング牧師の言葉が今も我々の心に響くのは，キング牧師の描いた夢が，私たちの理想となる世界を想像させるからなのではないでしょうか．

私たちは見えている世界の中だけでしか生きているわけではありません．想像の世界が現実の行動の原動力になることもあります．キング牧師が語る夢に私たちが感銘を受けるのは，その内容によって私たち自身がつき動かされるからなのだと思います．私たちの感情や意思を動かすからなのではないでしょうか．なぜ動かされるのかというと，おそらく人間とは単に眼に見える世界，事柄に反応するだけで生きているわけではないからです．私たちは現実にはまだ存在しない想像による世界をつくるために，その理想や理念を実現しようとしているのです．そしてそのことがまた人が生きていく上で大事なことなのではないかと思うのです．

「ブレードランナー」という映画があります．原作はフィリップ・K・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』という小説です．この小説は，人間とは何かを問う小説です．そこで大事なのは，感情です．アンドロイドは感情移入ができないから人間にはなれないというのです．タイトルにある「夢を見るか」の夢とは夜寝ているときにみる夢と考えることもできるのですが，今日お話ししてきた夢とも考えることができます．小説の中では，主人公のデッカードがアンドロイドは夢を見るかと自問しています．そのときの夢は，奴隷としての生活から解放されることです．アンドロイドは奴隷生活から解放されることを夢見ているのだから，人間と違うと言えないのではないかと考えます．そうすると，つまりこの小説では，夢を見る，夢を持つことこそが，実は人間を人間たらしめている性質なのだと言っているのかもしれません．

夢を持つことは幸せをもたらす

話を戻します．実は，私たちがおこなった調査からは，夢を実際に実現した人は約 3% でした．ほとんどの人は実現していないのです．実現した人も小学生のときからかなり現実的な夢を抱いていた人達でした．身も蓋もない話です．夢を持っていたって大半の人は実現しないのです．それはとても残念なことだと言えそうにも思うのですが，本当に残念なことなのでしょうか．

夢を実現しなかった人達が不幸せなのかというと，そうではありません．今の生活や仕事に満足している人が実際には多いのです．夢とは，その実現のために自らが主体的に動くことこそが大事で，その結果として実現するかどうかはあまり重要ではないのかもしれないのです．

調査から，小学生のときに夢を持っていた人と持っていなかった人について，今の生活に満足している人の比率を較べてみると，夢を持っていた人が 55%，持っていなかった人が 33% でした．つまり夢を実現したかということも大事なのかもしれませんが，夢を持つということ自体が，私たちが生きていく上では人生を豊かにしてくれるのかもしれません．小学生のときに夢を持っていたから，今が幸せなのだと単純につながるわけではないと思います．夢を持てる人の背景が影響し

ているのかもしれません．ただ夢を持てるということ，夢を語れるということはおそらく人生において大事なのだと思います．それこそが人間らしい営みなのであり，我々の人生を満足させてくれるものなのだと思うのです．

（社会学部教授）

2024. 6. 20（木）

「違和感」という宝

打　樋　啓　史

私は見張り場につき
砦の上に立って見張りをしよう.
主が私に何を語り
私の訴えに何と答えられるかを見よう.
主は私に答えられた.
「この幻を書き記せ.
一目で分かるように板の上にはっきりと記せ.」

（ハバクク書　2 章 1-2 節）

夢を語るのは苦手だけれど・・・

「I Have a Dream」という共通テーマですが，私自身の夢について話すとなると，実は困ってしまいます．私はこれまであまり夢や目標というようなものを持ったことがありません．夢を持って，それに向かって努力して生きるタイプではないのです．子どもの頃から，将来の夢を書く時は困っていました．「できれば楽をして生きたい」という程度です（笑）．私の父は小さな食品店を営んでいて，私は子どもの頃から店を手伝い，仕事の大変さをよく知っていました．「仕事はしんどいものだ」ということを幼い時から実感していたので，働かずに生きる方法を考えてきたという不真面目な人間です．

そのような私でも，これまでの人生を振り返ると，自分を動かし，方向付けてきたのは「違和感」だと思います．つまり，自分を取り巻く環境や社会や状況などについて，「何か違う．何かしっくりこない．何か嫌だな」と思うことがよくあり，その違和感が自分の中に芽生えて強くなった時に，夢とまでは言わなくても，「こうしたい．こうなったらいいのに．こんな風にやってみよう」ということが見えてきました．自分はその方向に進んできたと言えます．「違和感は夢の裏返し」ということです．

先日のチャペルメッセージで，荻野先生が「なぜフランスの大学に留学したのか」という質問をされて答えるのが「面倒くさい」と言っておられました．私は牧師なので，「なぜクリスチャンになったのですか」とよく質問されます．実は，これも少し面倒くさい質問です．しかし，恐らく初めてチャペルでそのことについて話してみたいと思いました．

それが今話した違和感と関係しています．

ハバククの預言：幻を書き記せ

今日は，旧約聖書のハバクク書の言葉を読みました．聖書の中ではかなりマイナーな文書ですが，なかなか素晴らしい内容です．ハバククは預言者，つまり古代ユダ王国の精神的指導者でした．その時代には，今と変わらず不正がまかり通り，悪が幅を利かせていたようです．その中でハバククは，「神様，あなたは善の神であり愛の神のはずです．それなのに，なぜこんなに悪が幅を利かせて善人たちが苦しめられているのでしょうか？おかしいではないですか！」と神に訴えます．それに対する神の答えが今日読んだ言葉です．

神は何と答えていたでしょうか．不思議な答えです．「こんな理由だよ」と真っすぐに答えるのではなく，神はハバククに「幻を書き記せ」と言われるのです．「幻」とは「夢」のことです．英語の聖書では，「Write the vision down」となっています．訴えるハバククに，神は，「あなたのビジョンを，あなたの幻を，あなたの夢を書き記しなさい」と言われます．つまり，「あなたの訴えや違和感，『もやもやして嫌だ！』という気持ちは，あなたの夢の裏返しなのですよ」と言っておられるのです．「だから，むしろあなたの夢や幻をはっきりと記しなさい．それを明確にしなさい」というのです．とても印象的なやりとりです．

私はどのようにしてキリスト者になったか

私がクリスチャン（キリスト者，キリスト教信者）になった話に戻ります．私はそもそもクリスチャンホームといって，代々キリスト教信仰が受け継がれた家庭で生まれ育ちました．母方では私が４代目のクリスチャンで，曽祖父の代から続いてきました．日本では私の歳で４代目のクリスチャンはなかなか珍しく，私の子どもが５代目になります．曽祖父は尼崎城に仕えていました．明治時代に入って「廃城令」が出されて城が取り壊され，曾祖父は職を失うことになったのですが，城からまとまったお金を受け取り，それで事業を始めました．その頃に宣教師と出会い，クリスチャンになり，事業で得たお金で教会創立に貢献したそうです．そうして創立された教会が，私がその後通うことになった日本キリスト教団尼崎教会でした．

私は幼い頃から，親や祖母に連れられて，教会の子ども向けプログラムである「教会学校」に通いました．やがて関西学院中学部に入学し，学校の課題として教会に行くことがあったので，教会学校には通い続けていました．尼崎の下町の教会で，楽しい仲間たちと一緒に教会学校に通いましたが，私も含めて皆あまり真面目なタイプではなかったので，よく先生を困らせていました．

中学２年生の初め頃まで教会学校に通いましたが，徐々に足が遠のいていきます．部活が忙しくなったこともありましたが，日曜日まで朝起きて教会に行くことが面倒になったのです．また，自我が芽生えて，自分の家の宗教であるキリスト教が次第に疎ましくなってきた時期でもありました．周りにはほとんどクリスチャンがおらず，神社や寺が普通という環境でした．その中で，キリスト教というのが異質であり，ちょっと「イキっている」感じがして嫌だったのです．中学生の頃

にキリスト教の中身が分かってくると，「何か偽善者っぽくて，きれい事ばかり言っている」などと思うようにもなってきました．それで中学・高校時代はほぼ教会に行かなくなって，大学生になっても足を運ぶことはありませんでした．それについて親は何も言わずに私を放っておいてくれました．

再び教会に足を踏み入れたのは大学２年生のクリスマスでした．クリスマス礼拝に行った理由は，２歳下の妹が洗礼を受けるからでした．妹は，私と違って，ずっと教会に通い続けていました．洗礼を受けると聞いて，私は大変驚きつつ関心を抱きました．私が意識的に遠ざけてきた家の宗教を妹は受け入れて，洗礼を受けてクリスチャンになろうとしている．一体どういうことなんだろうと関心をもって，洗礼式が行なわれるクリスマス礼拝に参加したのです．

久しぶりの教会での礼拝に緊張しましたが，洗礼式の後にバッハが作曲したクリスマスの賛美歌が歌われたのを，今でもよく覚えています．『まぶねのかたえに』（『讃美歌21』256番）という，とても美しいクリスマス曲です．自分でも驚いたのですが，私はその賛美歌を歌いながらとても感動し，涙を流していました．その教会での洗礼式は水を頭に垂らす儀式でしたが，妹の洗礼式に臨席して，言葉では説明できない何かが自分の中に生まれました．そして，それに続くバッハの賛美歌の歌詞や旋律が，自分の中の何かを強めてくれるような不思議な体験でした．それ以来，私は再び教会に通うようになり，その翌々年の３月，大学３年生の春休み（４年生になる直前）に洗礼を受けました．イースター（復活祭）という祝日でした．

不真面目だけど真面目

その後，教会生活が続いた理由は，楽しかったし，面白かったからです．私が大学生の頃はバブル全盛期でした．大学生も派手な服を着て高級車に乗って，女の子は「ワンレンボディコン」で同じような格好をして，マハラジャというディスコで踊るというように，時代が浮かれていました．私はそんなタイプではなかったのですが，だからと言って決して真面目な学生ではありませんでした．授業にはほとんど出ずにバンド活動に明け暮れていました．高校の頃からロックバンドで活動し，大学ではバンド活動をするか映画を見に行くかでした．一日中，映画館で３本立てを見ることもよくありました．今も私は授業でよく映画を使いますが，この学生時代の映画と音楽漬けの生活から得るものが多かったのです．当時はそれでも単位が取れる時代でした．そんな風に，授業や勉強は極めていい加減な，この時代の典型的な大学生の生活をそれなりに楽しんでいました．

しかし，皆さんと近い20歳の頃，私の中にはとてつもなく空虚な感覚や違和感がありました．今の大学生もそうかもしれません．皆が同じような言動で，友達と表面的な話はできます．しかし，適当に合わせて楽しく過ごしているようで，本当に自分が話したいことや深い話はできません．自分が関心のある人生や社会についての話をすると，浮いてしまうからです．その中で，どのように生きたいかもよく分からず，もやもやとした違和感を抱いている自分がいました．

妹の洗礼式がきっかけで久しぶりに教会に行ってみると，変わった人がたくさんいました．教会に来るのは，一般社会から見るとそ

のような人が多いのです．これがよかったんですね．子どもの頃からそのまま教会生活を続けて，クリスチャンになっている同世代の幼なじみもいました．色んな年齢の人，色んな世代の人と話ができました．

その中で，音楽活動をしている幼なじみと新しいバンドを組みました．その教会の牧師が自由な人で，音楽が好きで，礼拝堂でバンドの練習をさせてくれました．しかも，その教会には学生寮があったため，家に帰るのが面倒くさい時は（すぐ近くだったのですが…）そこで寝泊まりさせてもらいながらバンドの練習をしました．夜はビールを飲みながら，大学ではできないさまざまな社会の問題について語り合いました．「この腐った社会を変えないといけない！」など，一昔前の学生のような話題で盛り上がりました．

私の曽祖父が中心になって設立したこの教会は，社会的関心が強く，差別や人権や平和の問題に取り組んでいる，なかなか活動的な教会でした．教会のメンバーの多くは，知識や経験が豊富で，学校ではできない話を聞くこともできました．私は一般的な意味で決して「真面目」な学生ではありませんでしたが，ある意味で「真面目」だったのだと思います．不真面目だけど真面目．だから，バブルで浮かれた世間一般とは違う，そこでは「何の得にもならない」とばかにされるような真面目さが自分にはしっくりきて，教会にはそれがありました．しかも音楽もあり，そこにはシンプルかつあたたかい交流がありました．

個人の違和感が歴史を動かす

社会や大学に対する違和感があったからこそ，教会との出会いで自分にとって大事なものが見えてきました．そして，やがて洗礼を受けてクリスチャンになって今に至っています．決して劇的な救いの体験があって信仰に目覚めたわけではないのです．相変わらずキリスト教には嫌な部分や変な部分があると思っていました．全てを受け入れたわけではなかったのです．

４代目のクリスチャンというバックグラウンドをもつ者の特性かもしれませんが，「ああ，この道は大丈夫だな．自分に合ってるな」という，説明できないような圧倒的な安心感がありました．関西学院大学商学部を出てから神学部に編入し，卒業して牧師になって今に至っています．そのおかげで，世界中の人たちとキリスト教をチャンネルにしてさまざまな出会いが与えられて，皆さんとも出会えて本当に良かったと思っています．

ただ，私は今日のこの話で，皆さんに「クリスチャンになってください」と言う気は全くありません．ご安心ください．なる人がいればそれでよいですが，このような人生もあるということを知ってもらいたいというだけです．皆さんに伝えたいのは，違和感を大事にしてほしいということです．皆さんの中の違和感は夢の裏返しです．自分の道を見つけ，前進するための大事な一歩が違和感です．違和感を持つ人がいなくなったら，その社会は終わりです．この社会や国，大学のありようが当たり前だと思わないでください．「何かもやもやしておかしいな」と思ったことを大事にしてほしい．違和感こそ，皆の中に宿る宝なのです．

キング牧師の「I Have a Dream」という夢も違和感から始まったのでした．違和感どころではない，もっとさらに深刻な状況から

こそ，「I Have a Dream」が生まれたのです．それは個人の利己的な夢ではありません．自由と平等な社会が来るようにという，普遍的で永続的な夢がキング牧師の違和感から育まれたのです．個人の違和感が歴史を動し，アメリカの国政に大きな影響を与えたのです．キング牧師の夢は受け継がれて，こうしてチャペルアワーのテーマにもなって，今も多くの人の心を動かしています．違和感こそ，皆の中に宿る宝です．私はこれからも（この歳になっても）違和感を大事にしながら生きていきたいと思っています．

（社会学部教授・宗教主事）

2024. 6. 25（火）

地域と「ついで」につながる社会

大 岡 栄 美

こんにちは．社会学部の大岡です．社会学部の副学部長をしております．１年生の皆さんには入学式の時にご挨拶させていただきました．社会学部では「関係性の社会学」をテーマに，つながりやネットワークの効果についての授業を担当しています．今月のテーマは「I Have a Dream」です．社会学部生のみなさんと「こんな社会になったらいいな」というこれからの社会像についての考えを巡らせる時間になればと思います．

地域との関わり

皆さんの中には，関西学院大学のある西宮市が地元だという人もいれば，故郷を離れて，進学とともに西宮居住となった，あるいは自宅のある大阪，和歌山などから通っている人，いろいろな人がいると思います．私の担当する研究演習はフィールド社会学専攻ですが，調査実習のため，西宮市での様々な活動に関わる機会があります．あえて，学生と西宮市の出会いを橋渡しできるような調査フィールドを選んでいます．それはみなさんの多くが，４年間この上ヶ原のキャンパスで学んでいるにもかかわらず，西宮北口駅での乗り換え，阪急西宮ガーデンズくらいしか，西宮市との接点を持たないまま，卒業してしまうことを非常に残念に思ったことが背景にあります．西宮市には甲子園球場はもちろん，日本酒の酒蔵，海と山，川などがあります．コンパクトな中になんでもある，非常に魅力的なまちです．しかし普段の生活の中で，地域との接点が生まれる機会はそう多くはありません．

先日２回生の研究演習選考があり，面談で１人の社会学部生と話をする機会がありました．その学生は大学進学を機に一人暮らしを始めたそうです．隣人との付き合いもなく，近所にお付き合いのある人もいないという状況で，なんとかもっと地域の人と関わりたいと思い，ある日１人で近所の飲食店に出かけたそうです．するとお店の方が，「学生さん？」「1 人で来たの？」などと話しかけてくれて，「これからもこのお店に通おうという出会いがありました」，と嬉しそうに教えてくれました．新たな関係を開拓できる勇気と行動力に感心しましたが，なかなか誰もがこうした行動力も持っているとは言えません．

そもそも西宮市かどうかにかかわらず，地域に関わる意味を，皆さんの多くは感じていないかもしれません．サークルとバイト，友人との時間，大学生の生活は多忙です．通学に時間がかかるならなおさらバイトも大学の

近くではなく，自分の慣れ親しんだ「地元」で選ぶことも多いでしょう．そして慣れ親しんだ地元であっても，小学校，中学校，高校，大学と年を重ね，生活圏や行動範囲が広がるにつれて，地元での活動との距離はむしろ広がっていくのが多くの人の経験ではないでしょうか．また SNS を通じ，時間や空間を超えて，自分が選んだ関係性を自分が所属するコミュニティにできます．そのため，地域との関わりは最小限になり，多くの人にとり必要性を感じるものではなくなっているかもしれません．

地域側の事情

その一方地域は，地域における様々な課題に向き合う上で，これまでにないほど若い力を必要としています．例えば，西宮市では 6 年後の 2030 年度に，西宮市立中央図書館を阪神西宮駅直結の「まちなか図書館」として移転再整備する計画があります．新しい施設をより長く使うことになるのは，若い世代です．そこで「まちの未来を担う若い世代が主役となれる場」としての図書館作りを目指し，西宮在住，在学，まさにここにいる皆さんのような学生のアイデアや意見を求める「GO-DO-PROJECT」への参加者を募集しています．（ちなみに募集期間は 7 月 12 日までで，3 回の単発の活動で終わります．）このように若いエネルギーや従来にない発想力は常に求められています．

またあまり明るい話題ではないかもしれませんが，皆さんもご存じのように日本は超高齢社会になり，これまで地域活動を支えてきた担い手が十分に確保できなくなってきています．PTA 活動や，子どもの登下校の見守り，自治会活動などです．子ども会活動や地域のお祭りも維持なくなるところが増えています．担い手不足は若い世代のチカラを必要とする大きな要因の一つです．

最近，地域活性化やまちづくりをテーマにする私の研究演習には，地方出身で，自分の出身地域の過疎化や若者の流出などの社会課題を自分ごととして考え，自分の地元を元気づけるために学びたいと考える学生が増えています．それ自体はもちろんとても嬉しいことですが，同時に若者が自分中心の未来だけではなく，地域の苦しい実情をなんとかしなければと考えざるをえない，日本社会の切迫した状況に危機感を抱いてしまうのも事実です．

大学生の地域参加

ところで，みなさんのような学生の側にとって，地域に関わるとどんないいことがあるのでしょう．先ほど地域側の事情についてはお話ししましたが，皆さんの側としては，地域と関わらなくても生活はできますし，そもそも参加することに楽しさややりがいがあれば，若者側からもっと地域に関わるようになるのではないでしょうか．

地域の関わる楽しさややりがいは実はたくさん存在しています．先日私はゼミの活動で，西宮市の北部に新たに開始した地域交流拠点「みんなほくほくつどい場ばんぶー」のオープニングセレモニーに学生と一緒に参加してきました．学生たちは地域住民ではありません．しかし新しくスタートするこの場が地域住民の新たなつながり作りの拠点になればという思いをもち，スタッフとして活動しました．そのとき，高齢者の住民の方からは

「大学生から大学の話を聞けて嬉しい」，「また来てね」と声をかけられ，充実感や達成感を得ていました．またオープニングセレモニーの様子をインスタグラムのストーリーにあげ，「すぐにこんな動画を作成，編集して，載せられるなんてすごい！」と感謝されていました．学生生活の中で，自分と同世代の人とだけ関わっていると，自分の価値を確認する機会は限定的かもしれません．自分のできることは大抵周りの学生もできますし，何なら自分よりもできると感じる人ばかりが周りにいるようにも感じられるからです．

地域には多様な人がいます．世代も異なるため，時間の進み方や話題が合わないことも存在します．その反面，多様な人がいるからこそ，自分が「当たり前」にできることが，大きな強みとなることも多いです．それは重い荷物を持てること，動けること，若さそのものだったりもします．地域という場で，普段は感じられない，自分の価値を再認識する機会は皆さんが思う以上に存在しています．

また地域には新しくて，ユニークな活動をしている人たちがたくさん存在しています．去年学生にフィールドワークで参加してもらった活動に，西宮市の苦楽園ストアーズMTG 主催により行われた「ハッピーハロウィン」のイベントがあります．15 年ほど前から，日本の様々な商店街では，後継者不足や郊外化の影響から，商店街に空き店舗が増えるなどの課題が生じています．協力して地域を盛り上げようとする商店街組合などがありますが，なかなか協力者が集まらないなどの課題もあります．しかし苦楽園ストアーズMTG では，30 代から 40 代を中心とした若いオーナーたちがお店同士の横のつながりで，まちを元気に，魅力的にする活動を展開することに成功しています．ハッピーハロウィンはそうしたイベントの一つで，苦楽園にお店を構える，飲食店，美容院，整体，不動産屋さん，様々な職種のメンバーが，ハロウィンの一日に，お店の人も仮装をして，まちを歩く子どもたちにお菓子を配る一大イベントです．いつも通りの仕事にプラスアルファして，ついでにまち全体をイベント会場にする，そんな活動です．

大人が本気で楽しく働いて「まち」を元気にする，そんな活動にボランティアとして参加した学生たちは，エネルギーと刺激を得て，自分の将来の「働き方」のヒントを得たようでした．このように地域には面白い活動があり，ユニークな人たちと立場を超えてフラットにつながる機会があります．

地域に関わることの難しさ－地域デビューからパラレルキャリアへ

実際に参加してみれば，地域デビューは自分の価値を再認識し，新たな出会いや学びにつながります．しかしゼミでの調査活動のようなきっかけを作り，背中を押さないと学生と地域はつながらないとも感じています．理由の一つとしては，これまで今まで地域に関わるには，「とことん関わる」が前提になっていたからかもしれません．例えば町内会や地域の清掃活動，地域のお祭りなどでも，負担感を感じても断れない位に，継続して，関わり続けることが前提になっていました．それでは多忙な学生がコミットすることは難しいでしょう．

この問題に対し，法政大学大学院の教授で『地域とゆるくつながろう！』の著者である石川恒貴さんは，もっと気軽で，安心して，

ゆるく地域とつながることを推奨しています．これまでの日本社社会はともすれば仕事をしながら，地域活動に関わることが難しい社会でした．しかし長寿化が進むこれからの社会では，仕事，家庭，などの１つのワークに全身全霊を注ぐのではなく，パラレルキャリアとして，個人が仕事，家庭，社会貢献，学び，趣味，地域活動を複数同時に行う，柔軟なキャリアを構築する社会になっていくとも言われています．これまでのような，会社員時代は仕事のためにすべてを会社に捧げて，定年後にセカンドライフとして地域に関わるという生き方ではなく，自分のやりたいことを起点に仕事と同時並行で地域に関わり，それが自分の仕事にも活きてくるというパラレルキャリアが主流になっていくことが期待されているのです．先にご紹介した苦楽園ストアーズ MTG もその一例と言えるでしょう．

自分の好きや強みを活かして，仕事や学生生活の「ついで」にゆるく地域に関わる，こうした生き方を選ぶ人が増えることで，私たちの社会の在り方はどう変わるでしょうか．既存のシステムが担い手不足でうまく回らず，社会全体が疲弊している部分を，それぞれの人が関わりしろを増やして，負担なく支え合う社会の形を作っていくことができるのではないでしょうか．もちろんそのためには，私たちの社会は古い慣習やしがらみを捨ててアップデートする必要があります．しかし，一定の人だけが深く関わる地域の在り方から，より多くの人がゆるく広く関わることのできる社会になっていく未来がすでに始まっている気もします．

そしてそうした社会が「こんな社会になったらいいな」の一つの形かもしれません．西宮市で学ぶ４年間，ぜひ皆さんも地域とついでにつながってみてください．大学の外にでることで，様々な人に出会い，自分のポテンシャルを再確認し，関西学院大学の所在する西宮のファンにもなっていただけたらと思います．

（社会学部准教授）

Ⅲ．コミュニケーション
－「伝える」ということ

2024. 10. 10（木）

はじめにコンテンツありき

難　波　功　士

コミュニケーションについて話すように言われて，いろいろと考えました．大学生の皆さんがコミュニケーションという言葉が気になるとすると，単体ではなくてコミュニケーション能力ということや，略してコミュ力ということになると思います．就職活動にまず必要なのはコミュ力だ，などと言われることもあるでしょう．

多くの学生は，初対面の人ともすぐに打ち解けて，集団の中心にいて話を回して，盛り上げることをコミュニケーション能力とイメージしています．この先，常に必要なものだと思っています．しかし，それが得意ではなくて，人見知りで集団が嫌いな人も多いと思います．この先どうなるか不安に思っている人もいるかもしれません．しかし，恐らく大丈夫です，よく知りませんが．今日は，そんな話をします．

番組審議会というコミュニケーション

私が今日きちんとした格好をしているのは，チャペルで話すということもありますが，この後に大阪市内のテレビ局に行って番組審議会に出るためです．番組審議会は放送法という法律で定められていて，放送事業者はいろいろな意見を聞かなければいけません．そうした会議体を設けていて，そちらの委員を長くさせていただいています．ただ集まってしゃべるのではありません．その局が作った番組の一つが，審議対象番組として事前にブルーレイで送られてきます．それを見て，その番組についてみんなで話すことになります．

番組審議会では六〜七名の委員と，それぞれの部署の，局側の偉い人たちが並んでいます．そして，お誕生席や被告人席と呼ばれている席があります．チーフプロデューサーが多いですが，番組の制作を担当した方が一人，ないしは二人来られます．番組を作った方と局に向かって，思ったことや，その番組が良いか悪いかという話をする会です．

その場ではじつに複雑なコミュニケーションがなされていて，長くやっていると番組審議委員同士の人間関係もできてきます．他の方の発言を予想することも面白いです．私は最後から２番目にコメントすることが多いため，それまでがあまりにも辛口過ぎると，少し良く言ってあげようと思います．一方で，それまであまりにも褒められていると，少しけなしてバランスを取ります．「○○委員がおっしゃったように」などと，全体の話をまとめることも多いです．

その時々で，褒めるところが一つもない番

組も，ほぼ完璧な番組もあります．しかし会自体は，いつも大変面白い．番組の制作者は実際どのようなつもりで作ったのか，その番組を局の偉い人たちはどのように思っているのか．二時間ほど楽しく過ごせる，比較的好きな仕事のひとつです．

漫然とではなく，テーマを持ったコミュニケーション

なぜこのような会では，話がはずむのか考えてみました．その作り手がいる状態で，コンテンツを真ん中に置いて，それについてみんなで語り合います．コメントする側も二〜三分しゃべって，一つのまとまりのあるコンテンツを投げ掛け合いながら話をします．一つのコンテンツが投げ出されたことによって，いろいろなコミュニケーションが誘発されていきます．コメントすることでコミュニケーションを重ねていくことになります．

社会に出てからは，漠然と集まって仲良くなるよりも，テーマに向かってしゃべっていく中で，いろいろなアイデアやそれぞれの考えを塊として出し合っていくことが多いと思います．今，学生生活の中で集団の真ん中にいることができない人や，なじめない人やキャンパスに居場所がない人でも，そうしたコミュニケーションなら大丈夫な気がします．私自身も，人付き合いや集団がそれほど好きではありません．しかし，今日まで何とか生きています．学外・学内を問わず，人とつながりながらいろいろな仕事ができています．基本的に，コミュニケーション能力は非常に低い人間です．しかし，共通のコンテンツがあることによっていろいろなコミュニケーションが取れる人間だとも思っています．

私は今大学教員であり，人前で話したり，文章を書くことが仕事です．「あんたの場合はそうだろうし，テレビ局やコンテンツを作る仕事をしている人に限った話だろう」と思われるかもしれません．しかし，普段から皆さんもコンテンツを作って人に投げていると思います．私は今学期，広告文化論の講義をしています．受講生は一，二年生が多いのですが，時々レポートを書いてもらっています．提出されたレポート，そのコンテンツをみていくと，通り一遍で同じようなことを書いているものも多いです．一方で，「この人は何故こんなことが書けるんだろう」，「この人のことをもうちょっと知りたい，話してみたい」と思わせるものも時々あります．こちらはその人が投げてきてくれたコンテンツに反応して，レポートに高い点数を返していくのです．私が興味を持っているという意思表示をすると，その後に関係性が生まれて面白いことになることもあります．一，二年生とのコミュニケーションは，だいたいそんな感じです．

社会に出ていくときのコミュニケーション

ゼミの三年生に，夏休みについて聞いた時の話です．ある学生は，さまざまなインターンシップにエントリーして，スケジュールを空けておいたそうです．ただ，どのインターンにも呼ばれなかったため夏休みは暇で，バイトばかりしていたという話でした．三年生でインターンシップに行こうとすると，本番の採用試験ではなくても厳しい選考がある場合もあります．エントリーシートを書いて作文を提出して，さらに面接が何段階もありま

す．結局は討ち死にして，夏休みが暇になったケースもあるようです．

皆さんが三年生や四年生になった時に，多くの人が就職活動をすると思います．自分がしてきたことや感じたことを志望先に投げ掛けて，大人たちにそれを見て面白いと思わせなければいけません．興味を持ってもらって，呼んでさらに話を聞こうと思わせなければ道が開けない現状があると思います．その時は，大学時代に一生懸命打ち込んだことや，強く感じたことを書き込んでみてください．うまく言語化できるかは別として，人に与え得るコンテンツが皆さんの中にもあるはずです．それが伝われば良いと思います．テクニックではありません．してきたことやその中で悩んだこと，苦しんだことや考えたことの蓄積があると，人の興味を引いて心を動かすコンテンツが投げ掛けられると思います．少しでも興味があることがあれば，夢中になって一生懸命やってください．今はそのような時期だと思っています．

と言いつつ，私は大学二年生の双子の親です．息子は美術系の大学で演劇や映像ばかり作っています．娘は日本文学を専攻してけっこう熱心に学んでいます．親としては，「そんなことに興味を持って，あんたたち将来はどうなるの」と内心思っています．この場合は，「それでもうまくいきますよ，よう知らんけど」とは言っていられないため心配もします．しかし，何をすると良いのか，誰がどのように反応してくれるか，投げ掛けてみないと分からないものです．ただ，自分が一生懸命やって感じたことの引き出しや，経験の蓄積が多いと，いろいろなケースにうまく対応できると思います．

投げてみても相手が興味を持たないこともあると思います．その時は，空気を読むというコミュニケーション能力を発揮して別の話題を出しましょう．それが幾通りにかできる人は，次の段階まで行ける人だと思います．社会に出ても求められることに，臨機応変に応え続けられる人だと思います．今は人間関係がうまくいかない，コミュニケーションがうまくとれないと悩むことが多いかもしれません．でも，仲間と一緒にできることがあるほうが良いとは思いますが，自分一人でも熱中できることがあれば大丈夫だと思います．夢中になれるものが見つかりません，という人もいるかもですが…．それは，知らんがな，です．

コンテンツがコミュニケーションのきっかけになるという話をしました．コンテンツは特殊な人のみが作るものではなくて，皆さんも作らなければなりません．そして，作っていけるものなのです．そのような話もしました．そして，陽気なキャラクターの人が，コミュニケーション能力が高いわけではないと思ってください．私も非常に陰気なキャラクターで，大学時代も一人で動いていました．しかし，何とか生きてくることができています．そのような人間もいると思ってください．今，人間関係や友人関係でそれほど悩まなくてもよいと思います．

今回は一，二年生の皆さんと気楽にコミュニケーションを取るのみでよいと思っていました．しかし，学部長や理事長も聞いているシビアな状況でしゃべらなければいけなくて，少し緊張はしました．

でも言いたいことは，コミュ力を気にし過ぎず，自分にはそれがないのではと思い過ぎないということです．さまざまな形でのコミュニケーション能力の高め方もあるというこ

とを，できる限り感じてほしいと思ってお話しました．

（社会学部教授）

2024. 10. 23（水）

バベルの塔と翻訳の課題

――コミュニケーション・伝えることを考える――

Hans Peter Liederbach

世界中は同じ言葉を使って，同じように話していた．東の方から移動してきた人々は，シンアルの地に平野を見つけ，そこに住み着いた．彼らは，「れんがを作り，それをよく焼こう」と話し合った．石の代わりにれんがを，しっくいの代わりにアスファルトを用いた．彼らは，「さあ，天まで届く塔のある町を建て，有名になろう．そして，全地に散らされることのないようにしよう」と言った．主は降って来て，人の子らが建てた，塔のあるこの町を見て，言われた．「彼らは一つの民で，皆一つの言葉を話しているから，このようなことをし始めたのだ．これでは，彼らが何を企てても，妨げることはできない．我々は降って行って，直ちに彼らの言葉を混乱させ，互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう．」主は彼らをそこから全地に散らされたので，彼らはこの町の建設をやめた．こういうわけで，この町の名はバベルと呼ばれた．主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ，また，主がそこから彼らを全地に散らされたからである．

（旧約聖書創世記 11: 1-9）

バベルの塔

今月のチャペルの共通テーマはコミュニケーション，伝えることです．バベルの塔の物語はコミュニケーションの原点を描いています．そこでは，神が人々に多数の異なる言語を与えることにより，人類にいわば罰を与え，バベルの塔の建設を妨げたと書かれています．人類の元々の一つの言語（共通語）から，いわゆるバビロニアの言語の多様性が生まれました．同時に，異なる言語間で翻訳する必要性も生まれました．翻訳者，通訳者という職業が誕生したのです．

もちろん，巨大な塔は人間の傲慢さの象徴です．バビロンの人々は神のようになりたいと思い，塔の建設は彼らのほぼ無限の力を象徴するはずでした．彼らが一つの言語を話していたことは，この目標を追求するのに役立ちました．旧約聖書によれば，それによって彼らには不可能なことは何もありませんでした．共通の言語があれば，人間は望むものは何でも達成できるのです．

共通言語としての数学・科学

もちろん，これは単なる物語です．おそら

く人間は従来から異なる言語を話してきたのでしょう．一つの原初の言語というイメージは，一種の過去の理想です．みんなが同じ言語を話していた時代には，天に届く塔を建てることができたというわけです．

今日，実際にバビロニア人には決して達成できなかったような塔が建設されています．ニュー・ヨーク，東京などの大都市のスカイラインを思い浮かべてみればイメージはつくでしょう．スカイツリー，ロケフェラービルなどは，その建設に関わるエンジニアと建築家が共通の言語を使用しているからこそ建設されえた建物・塔です．この共通言言語は数学，自然科学の言語です．これは普遍的なコミュニケーションツールです．10 月に自然科学分野のノーベル賞が授与されます．異なる文化や国出身の科学者たちが集まり，国際協力で科学を前進させることは，この普遍的な言語なしでは不可能でしょう．

言語の境界を拡大する翻訳

しかし，日本語，英語，ドイツ語のいわゆる自然言語はどうでしょうか？ここでは，共通語ができる見通しは，今のところ，ありません．そもそも，そのような共通語が人類の歴史における進歩を意味するとは私には疑わしいです．

ある人は，そのような共通語が翻訳を不要にするだろうと言うかもしれません．それは進歩ではないでしょうか？私はそう思いません．ナチスから逃れる途中で 1940 年に自ら命を絶った哲学者ヴァルター・ベンヤミンは「翻訳者の課題」という論文の中で，翻訳の目的は外国語の単語の意味を自分の言語に移すことではなく，自分の言語を変容させることだと書いています．

言語と言語の間，意味を移すのは確かに可能です．取扱説明書や他の実用的な目的を持つテキストの場合などです．例えば，国際空港での観光客向けの案内などがそうです．このようなものは簡単に翻訳できます．

しかし，詩のような文学作品や，聖書のような聖なるテキストはどうでしょうか？これらには実用的な目的はありませんが，より深い意味があります．ベンヤミンは，このようなテキストの翻訳は，自分の言語を「拡張する」ためのものだと言っています．翻訳は，言語で言えることの境界を押し広げるのです．

このような言語の境界の拡張や拡大のいくつかの例があります：ルターのドイツ語聖書訳，ゲーテの詩，ヘーゲルの哲学．これらはドイツ語を拡張しました．彼らの表現や用語は日常言語の中に定着しました．

ドイツ語の境界を拡大したルター

ルターの聖書訳からのいくつかの例を挙げましょう：「Lästermaul」（口の悪いやつ，詩編 140: 11），「sein Licht unter den Scheffel stellen」（自分の能力を包みかくす，マタイ 5: 15），そして「Perlen vor die Säue werfen」（豚に真珠を投げ与える，猫にコバンを与える，マタイ 7:6）があります．「Machtwort」（有無を言わさぬ断定）もルターに由来するとされています．これらの表現はすべて，今日までドイツ語の日常会話で生き続けています．例えば，政治の場では，首相に「Machtwort を言う」ことをしばしば求めます．これは，首相が内閣の行き詰まりを解消したり，政府内の争いを

終わらせたりすることを意味します．

ルターは，言語は「生活の座」（Sitz im Leben）を持つべきだと言いました．そのため，彼の聖書訳は非常に分かりやすいドイツ語で書かれています．さらに，ルターは聖書訳によってドイツ語の書き言葉の統一に大きく貢献しました．そして，この統一なしには宗教改革はほとんど不可能だったでしょう．

海を渡る翻訳者

翻訳のもう一つの側面にも注目する価値があります．「Übersetzen」（翻訳する）という言葉に耳を傾けると，そこにある種の運動・動きを感じます．「Übersetzen」には「über-setzen」（渡る）という意味もあります．川を渡るように．つまり，翻訳者は新しい領域に踏み出すのです．本質的に異なる言語の領域に．そこで彼は，自分の言語とは大きく異なる単語，表現，言語構造に出会います．この出会いの中で，言語拡張の可能性が見えてくるのです．

西周，福沢諭吉などの明治時代の知識人の経験を考えてみましょう．彼らは，政治，経済，哲学，歴史学などの重要な著作を英語，フランス語，ドイツ語から日本語に翻訳することを任務としました．そして，これらの翻訳者たちは実際に「渡り」ました．つまり，海を渡ってヨーロッパやアメリカで異質なものを習得したのです．これも，（二重の意味での）翻訳による言語の拡張の一例です．

これらの拡張の可能性は，バベルの塔の建設のおかげです．より正確に言えば，人間の傲慢さを多言語の導入で罰しようとした神の介入のおかげです．実際には，神はそれによって人類に大きな贈り物をしたのです．なぜなら，翻訳がなければ，私たちの生活はずっと貧しいものになるからです．

（社会学部教授）

2024. 10. 24（木）

異文化・異言語・先行研究・一般常識との「会話」

西　村　正　男

はじめに

今月の共通テーマは，「コミュニケーション−「伝える」ということ」ですが，大学院では，まさにこの「コミュニケーション」という名前が付いた，言語コミュニケーション文化研究科に所属しています．皆さんもご存じかもしれませんが，学部は社会学部，文学部というように呼びますが，大学院は，学部ではなくて研究科と呼びます．社会学部の上にあるのは社会学研究科です．ですが，私のように社会学部や他の学部で外国語を中心に教えている教員は，社会学研究科ではなくて，独立した研究科である言語コミュニケーション文化研究科に所属しています．現在，私はその研究科で研究科副委員長を務めています．

ところが，私はコミュニケーションがそれほど得意ではなくて，今回のお題をいただいて何について話すか悩みました．駄じゃれとお酒が好きなため，ノミニケーションについての話をしようかと思いました．しかし，恐らくチャペルに来る人の多くは１回生の未成年で，それは良くないと思い直しました．先ほどもお話した通り，私は言語コミュニケーション文化研究科に所属しているため，まずは言語の話から始めたいと思います．

中国語と挨拶表現

先ほど，私は中国語を教えていると紹介していただきました．この中で，第２外国語として中国語を履修している人はどの程度いますか．数名いますね．中国語の共通テキストに著者の一人として私の名前が載っています．初めて私を見た人は，教科書に名前が載っている先生かと思ってくれればと思います．

コミュニケーションは，まずはあいさつからです．「こんにちは」は中国語で「你好（ニイハオ）」です．これは中国語を取っていない人でも知っていますよね．「さよなら」はみなさん知っているのでしょうか．「再见（ツァイチエン）」です．では「ありがとう」はどうでしょう．なぜか日本では「シェイシェイ」と間違えて覚えている人が多いのですが，正しくは「谢谢（シエシエ）」です．次は，恐らく中国語を勉強していない人は聞いたことがないと思います．中国語を真面目に履修している人は既に習ったはずですが，「久しぶり」は中国語で何と言うでしょう．「好久不见（ハオジォウブージエン）」です．中国語を学んだことがない人は「なに？」と思うかもしれませんが，これは「長い間会いませんでしたね」という意味です．

皆さんは，全員英語は勉強したことがあると思います．では「久しぶり」を英語で言えますか．意外と難しいです．いろいろな言い方があると思いますが，アメリカの俗語で，“Long time no see”という言い方があります．少し変な英語ですが，辞書にもきちんと載っている言葉です．中国語Ⅱを履修している人は，「好久不见」は教科書の第７課で学習したと思います．私は第７課を教える際に，“Long time no see”という言葉は実は中国語から来たのかもしれないと毎回言っています．恐らく，アメリカに移住して働いていた中国人が英語を話す人とやりとりをする時に話したブロークンな英語から生まれた言葉ではないかと思われます．しかし，今回その話をしようと思って調べると，ネイティブアメリカンの言葉から生まれたという説もあるそうです．はっきりとは調べがつきませんが，中国語を学んでいるわれわれにとっては，中国語から来た言葉であるように思われてなりません．

中国語の方言の格差とコミュニケーション

言葉がコミュニケーションの中心だとすると，言葉を覚えることが非常に重要です．私自身は中国語圏のメディア文化史を研究していて，中国映画や台湾映画にも大きな興味を持っています．ぜひ皆さんにもさまざまな映画を見てほしいと思っています．一応，台湾も中国語が「国語」とされていますが，実は台湾映画では授業で教えているような中国語以外にもいろいろな言語が飛び交っています．台湾語（あるいは「河洛語」や「閩南語」などとも言います）を使う人も少なくありませんし，その他の言語が使われることも少なくありません．香港映画も広東語が使われていますが，中国本土から多くの人が移住しているため，近年は広東語と中国の標準語が入り混じっている映画も少なくありません．台湾映画や香港映画を見る時は，ぜひ言語にも注意をしてほしいと思っています．

これは，前々回にチャペルで話した時にも言った気がします．私は 2018 年度に１年間台湾にいて，その頃に台湾の小説を翻訳して出版しました．台湾では中国語と台湾語の両方が使われていて，台湾語と思われる部分は関西弁で翻訳しました．しかし，実は日本語の標準語と関西弁の違い程度のものではありません．中国の標準語と台湾語との間や，中国の標準語と広東語の間には，全く別の言語と言われるほどの開きがあります．全く言葉が違っていてお互いに通じないことを，中国語で「鸡同鸭讲（ジートンヤージアン)」と言います．ニワトリがアヒルと話すという意味の慣用句で，お互いに好き放題にしゃべって会話が通じないという言葉です．

実は，この言葉にはもう一つの意味があります．違う言語で話をする場合を指すだけではなくて，同じ言語を話している場合にもこのフレーズを使います．われわれも，同じ日本語を話していても話が通じないことがよくあります．そういう場合はどうするか，というと，やっぱりノミニケーション．というのは冗談で，その場合は簡単な解決策はないでしょう．恐らくこちらにいる人の多くは社会学を学んでいます．社会学は社会を理解する学問のため，なぜ話が通じないかを考えることから始まると思います．

卒業論文と「会話」の重要性

ここから学問的な話に無理やり持っていきたいと思います．今日ここにいるのは恐らく１回生の人が多いと思います．まだ早いかもしれませんが，社会学部では卒業論文が必修になっています．私は今４回生のゼミを持っていて，卒業論文を書いてもらうために毎年苦労しています．論文の書き方入門のような本は数多くありますが，最近新しい本が出たため，今年の４回生にはそれを読んでもらっています．筑波大学の阿部幸大先生の『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』です．第３章以降に書かれていることは全員が従う必要はないと思いますが，第１章と第２章は論文を書く際には一読をおすすめしたいと思います．

その中にはいろいろなことが書かれています．まず，論文は事実を書くのみではいけません．私が指導した卒業論文も事実のみで終わってしまうことになりがちです．この本の著者は，その前にまずアーギュメントが必要だと言っています．アーギュメントという言葉を聞いたことがない人もいるかもしれませんが，テーゼ，論文の主題が必要だと言い換えても良いでしょう．論文は単に事実を書くのみではいけません．論文全体を使って論証していくような主題が必要と言っているのです．

では，より良いアーギュメントにしていくためには，どのようなことが必要なのでしょうか．筆者は，先行研究と会話をすることだと言っています．ここで会話の重要性が出てきました．「私はこう思う」など，独り善がりなことを書くのみでは論文とは言えません．事実を書くのみでもいけません．皆さんが論文を書く時には，ぜひ先行研究を調べて，それと会話をすることを心がけてください．

でももしかすると先行研究という言葉は堅苦しいかもしれません．私はゼミ生にこのように言っています．論文を書くための「会話」は先行研究に限らなくてもよいのです．社会で一般常識と思われていることに対して，何らかのデータを使って「ちょっと違うんじゃないの？」と説明するのです．一般常識とそのような会話ができると大変面白い論文になります．卒業論文を書かなければ卒業できない社会学部の学生として，皆さんも，ぜひ一般常識や先行研究と会話することを心掛けて頑張ってください．

（社会学部教授）

2024. 10. 29（火）

学問の「面白さ」を考える

石　田　　淳

はじめに

今ご紹介があったとおり，普段は数学や数理社会学という，名前に「数」が付く授業をしています．マニア向けの授業のため，来てくれる方もマニアが多く，ふだんはそのような方に話をしています．時々，チャペルの場にも呼んでいただきます．そのときはマニアな話題とは関係なく話ができるため，非常に良い機会をいただいています．ありがとうございます．今日も，それほどマニア向けではない話をしようと思います．

チャペルの講話でいただいたテーマは，「コミュニケーション―『伝える』ということ」です．通常は，チャペルの依頼をいただくのは学期が始まる前です．テーマを聞いて，話す内容を考え始めます．つかみの話までの大まかな流れは考えるのですが，その後はそれほど考えていません．今日は，一応つかみとしてこのような話をしようと思って来ました．その後どのようになるかは自分自身もまだ分かりません．

学問の「面白さ」を考える

「面白い」とはどのようなことか話します．今われわれは大学にいます．学問や勉強における面白さをどのように感じるかということと，それをどのように人に伝えるか，伝えられるかを考えたいと思います．それは，私自身が普段から考え続けていることです．「伝える」というお題をいただいたため，ぜひこの話をしようと思います．

例えば研究や勉強をしていて，面白いと感じる瞬間があるという経験は皆さんにもあると思います．われわれは，ある種の面白さを糧にして勉強や研究を進めていく側面があります．もちろん社会正義として不正を正す，あるいは問題を解決しなければならないという動機もあります．しかし，「面白いからやる」というさらに純粋な部分もあるはずです．よく知られた話として，フィロソフィー，哲学という言葉があります．元々のギリシャ語はフィロソフィアで，知恵を愛するという意味です．何より，研究や勉強が面白くて楽しいという内発的な動機があると思います．

笑いとは何か

では，どのような時に面白いと感じて，面白い問題を人に伝えられるのでしょうか．あるいは，人のどのような話を聞いて面白いと思うのでしょうか．それを考える時に最も良

いヒントになるのがお笑いの話です．お笑いの面白さと研究の面白さは，ある種，共通している部分があると思っています．「笑いとは何か」という，哲学的で社会学的な議論がいろいろとあります．その際に，個人的に参照するのは桂枝雀さんの話です．

皆さんはご存じないかもしれませんが，桂枝雀さんは落語家で，米朝一門の天才といわれた方です．この方が出てきた時は，インテリ落語家ともいわれていました．神戸大学の文学部に入って，その途中で米朝に師事して中退してしまいます．落語の技術を身に付けるだけではなく，特に落語における笑いとは何かということを学者さながらに追求した人です．おそらく追求し過ぎたせいもあって，心の病にかかって最後は非業の死を遂げます．実は，お笑いの世界ではそのような人が少なくないです．笑いを突き詰め過ぎることがあるのでしょう．

枝雀さんが言うには，笑いの本質は緊張の緩和ということです．緊張した状態が緩和されることで笑いが起きます．例えば周りの状況がよく分からなくて，怖いと感じて自分が緊張しているとします．その時に意外なことが起こると，緊張が解けて笑ってしまうことがあります．恐らく生理学的にも，緊張はそのような時に緩和されるのでしょう．

オチの類型

では，落語においては笑いを提供するためにどのように客の緊張を緩和させるのでしょうか．特に枝雀さんが考えたのは，落語の最後の「オチ」の類型です．緊張の緩和という点で，枝雀理論によるとオチには４つの類型があります．『らくご DE 枝雀』という本では，独自の図を使ってそれらを説明しながら古典落語を類型に分類していきます．

その４つの分類はさらに大きく２つに分けられています．１つは「離れ」で，常識の世界の話が進行していて，最後にそれが飛び出してしまいます．話が離れるのです．「どんでん返し」や「そんなあほな」というような，常識の世界から非常識に飛んでしまうということが１つです．もう１つは「くっつき」で，話が進んでいって少しミステリーがあった上で，最後にそれがうまくくっつきます．離れていくパターンとくっつくパターンがあります．くっつくパターンには，要するに謎掛けに対する答えがあるのです．それによって，「何や，そんなことか」という緊張の解放があって笑いにつながります．

くっついてあふれる

個人的に，学問や勉強の面白さは２つめの類型の「くっつき」であると考えます．少し謎や問題があって未解決なまま進みますが，最終的にはきちんと辻褄が合う．そこに快楽があるのだと思います．特に私は数理社会学という分野で，提示された謎を説明するために，うまくいくモデルを当てはめようとします．そうして，うまくはまるとそこに面白さの快感があるのです．

より一般的にいえば，おそらく何かと何かを結び付けることが，より広い意味での知的な快楽や面白さにつながるのだと思います．例えば，ある２つの見方は全く別のものと思っていたけれども，実は根底の部分では同じではないかという指摘を受けたとします．そうすると，今まで自分が見えなかったつながりが見えて，謎が解けて緊張の解放があっ

て，「面白い！」となります．もちろん「笑い」ではありませんが，ある種の快楽的な脳内物質があふれます．私はそれを「オモロ汁」と言っています．オモロ汁があふれる瞬間は，深夜でも「飛ぶ」ことがあります．

「面白さ」の種をまく

多かれ少なかれ，そのような面白さを原動力として学問は発展してきました．個別的な勉強でも面白さが必要だと思います．重要なのは，面白いアイデアを発見したり，あるいは人の話を聞いて面白がることができる人になることです．種を逆から読むと，芸人用語の「ネタ」になります．いろいろな種があって，今はつながっていないけれども何かの拍子に一気につながります．将来つながるべきいろいろなアイデアの種が，ブリッジを通して一気にリンクするということに面白さの原点があると思っています．何が言いたいかというと，面白さは求めようとしても得られるものではなくて，いろいろな種を自分の中でまいて，来るのを待つ感じなのです．

以前，ウッチャンナンチャンのウッチャンが出ている，「笑神様は突然に…」というテレビ番組がありました．「笑神様」とは笑いの神様のことです．その番組では台本なしに芸人に散歩をさせるのですが，そうすると他愛のないやりとりの中で大変面白い瞬間が訪れます．まさに神が降りるような瞬間があって，それが番組のタイトルになっているのですが，学問的な面白さも同じことだと思います．面白さを味わうために仕込みをしておくことが重要です．分け隔てなく，できる限りより好みせずに，取りあえず今は何が重要で何が必要なのかは置いておいて，いろいろなことをつまみ食いしてみることが良いです．特に大学という，学問的な自由が与えられた時間や空間でこういう仕込みをしておくことが非常に重要です．

最終的に言いたいことは，恐らくマニア以外は数学や数理社会学を好んで学ぼうとは思わないかもしれません．しかし，皆さんは取りあえず学んでみてください．それがいつか何かにつながって，ものすごい「オモロ汁」が皆さんの脳内を駆け巡るかもしれません．お待ちしています．

（社会学部教授）

2024. 10. 31（木）

時間をかけて，ゆっくりと

松 宮 園 子

『自分ひとりの部屋』

今回のテーマは「コミュニケーション」ということで，まさに“English Communication”の授業を毎年担当している身として，何か特別なことをお話したいと思うのですが，今日はむしろコミュニケーションの難しさ，そして時間をかけることの大切さを，いつものように文学作品をご紹介しながらお伝えできればと思います．

私が専門にしているイギリスの作家の一人にヴァージニア・ウルフという人がいます．彼女は 19 世紀末に生まれ，そして 1941 年に亡くなったのですが，おそらく 20 世紀のイギリスの作家でもっとも有名な一人と言えるかもしれません．知識人の家庭に生まれた彼女ですが，当時はまだ女性が大学に行くことが一般的ではなく，主には家庭教師からの教育や家にたっぷりある本を読むことで彼女は作家となり，数多くの小説やエッセイ，そして評論を残しました．今日ご紹介するのは彼女が書いた不思議なエッセイである『自分ひとりの部屋』という作品です．このエッセイの中で彼女は，自分を含む女性がいかに歴史の中でお金も教育も持たずに来たか，そしてそのために文学を志すことがいかに難しいか，を語りました．大変有名な本なので，ジェンダー研究やフェミニズム等の授業で聞かれたことがあるかもしれません．

こう紹介されると非常につまらなそうな本と思われることでしょうが，実はなかなか面白いです．一つには，この作品は彼女がケンブリッジ大学で学んでいる数少ない女子学生を対象に行った講演をもとにしているので，聴衆に「語りかける」スタイルがそのまま文章になっています．そして彼女は「女性が小説を書こうとするなら，500 ポンドの年収と自分だけの部屋が必要だ」という有名な言葉を，この中で残しています．500 ポンドというのはざっくり言うと今の日本円で 500 万円くらいとされています．

「真実のかたまり」

このウルフの言葉は，作品が出版された 1929 年段階でも大変な反響を巻き起こし，賛否両論が飛び交いました．ただ今日，ここでお話したいのはこの有名な言葉をめぐる議論や，その後たくさん行われた研究ではなく，ウルフのコミュニケーションの方法ということです．この言葉を述べる前に，ウルフは「講演者の役割は，聞く人が成果として持って帰れるような真実のかたまりを与えること」と述べています．つまり，あとから講演

を聞いた人が「こんな話だったよ」とわかりやすく，短い言葉でまとめられるような形でコミュニケーションを行うのが良い講演者だ，と言います．しかし興味深いのが，ウルフは「自分にはそれはできません」と最初からきっぱりと言います．

でも実際には，よくこのヴァージニア・ウルフという偉い作家が『自分ひとりの部屋』という本の中で，「女性が本を書くには500ポンドのお金と部屋が必要だ」と言った，という非常にわかりやすいまとめが，100年近くになる現代に至るまで世の中には流通しています．これは「真実のかたまり」ではないのでしょうか？

この質問への答えは非常に難しいものなのですが，たとえば皆さん自身はこのまとめを聞いてどう思われますか？　500万円の年収がないと作家になれないでしょうか？　あるいは個室という物理的条件が絶対に必要でしょうか？　そこにはたくさんの反論が出てくると思います．実際に同時代の男性の作家たちは「自分はそんな大金を持っていないし．部屋もないが，作家として頑張ってきた」と反論し，ウルフが所詮は恵まれた中流知的階級の出身であることを揶揄しました．

しかしこの『自分ひとりの部屋』が面白いのは，そもそも「真実のかたまり」を簡単に渡すことなどできません，と言っておきながら，「お金と部屋が必要」というまさに簡単なまとめを提供する，作者ウルフの意地悪さにあるように思います．頑張ってじっくりとこの作品を最初から最後まで読んでいただくと，ウルフが言いたいこと，訴えたいことはたしかに「簡単に持ち帰れるようなかたまり」になるはずがない，ということがわかります．つまり簡単なコミュニケーションなどあり得ない，人の考えていることをさっと短い言葉にまとめて，持ち帰るようなことはできない，ということの方がむしろ重要なメッセージのように思われるのです．

「わかりやすさ」は絶対ではない

良いコミュニケーションとは何でしょうか．たしかに私も“English Communication”の授業では「自分の考えを，簡単な，わかりやすい言葉で短く表現して伝えましょう！」と繰り返し言っています．たしかに，簡単でわかりやすい，言わば時間のかからない言葉でのコミュニケーションが重要な場面は生活の中でたくさんあります．大学で発表するとき，あるいは事務室で自分の聞きたいことを説明するとき，またアルバイト先や，あるいは就職面接等では，こうした「能力」がまさに求められることになります．

しかしその一方で，時間をかけなければいけないコミュニケーションもある，ということを忘れてはいけないと思います．特に最近は「シェアすること」の重要性が強調されるあまり，早く「シェアしなくてはいけない」あるいは「短く，わかりやすく伝えて，すぐにその結果を手にする」ことへの圧力も一方であるようにも思います．ヴァージニア・ウルフの「真実のかたまり」をすぐに与えることのないエッセイ中の言葉をご紹介することで，大切な思いになればなるほど，やはり伝えることは難しいこと，そして口に出すまで，さらには口に出してわかりあうために時間をかけるべきこともたくさんある，ということを覚えておいていただければ，と思います．今日の私のお話を短くまとめるとこのようなところですが，でもやはりお伝えするの

は難しいです．もしも興味を持たれたら，ウ　　んでみてください
ルフの本をぜひ時間をかけて，ゆっくりと読　　（社会学部教授）

Ⅳ.「違い」に向き合う

2024. 11. 6（水）

違いが生み出す差別・分断

中　谷　文　美

はじめに

今年の４月からこちらの社会学部に新任教員として加わりました中谷文美です．今日は皆さんとチャペルアワーをご一緒できることを大変うれしく思っています．

私は小学生の頃，字を読むことに非常にはまった時期がありました．とにかく活字を読みたくて，手当たり次第に読める本を探していました．当時の一般家庭にはそれほど多くの本はありません．家の中にあった本はたちまち読み尽くしてしまい，最後に手を伸ばしたのが本棚に置いてあった『聖書』でした．

私の家では，母が高校生の時に受洗してクリスチャンになっていたため，『聖書』があったのです．活字が読みたいだけの小学校３年生にとって『旧約聖書』はとても難解でしたが，私は宗教の書というよりも物語として読んでいたと思います．当時は古い訳で，「『もろもろの民』の『もろもろ』って何だろう」などと思いながら読み通したことを覚えています．ここまでは完全に余談です．

どこに違いがある？

さて，今月のテーマは「違いに向き合う」ですね．

私の専門分野は文化人類学で，その学問が拠って立つ基盤の一つは，まさに違いの認識にあります．それについてはもう少し後で詳しく話します．

まずはこの質問からです．こちらに立っている私とそちら側に座っている皆さんは，どこが違うでしょうか．もちろん私は教員の立場で，皆さんは学生です．しかし，皆さんの座っている側にはほかの教員の方もおられます．少なくとも今ここで，私と私以外の皆さんの間に確実な違いや区別があるとすると，皆さんがいわゆる洋服を着ていて私が和服姿ということです．立場や年齢，あるいは性別など，皆さんと私の間にはほかにもいろいろな違いがあるでしょう．しかし，見てすぐに分かる際立った服装の違いが，皆さんと私を確実に分けています．

では，その違いにどの程度の重みや意味があるのでしょうか．服装の違いなどは大した問題ではないとも言えます．しかし私は今，特別な機会を除いて一般の人々がほぼ着ることがない，にもかかわらず日本の伝統服という位置づけにある和服を着ています．くわしくお話しする時間がありませんが，実は私にとっては和服を着て歩くこともフィールドワークの一環ととらえています．たとえばこの帯は，私が長年調査してきたインドネシア

の伝統的な衣装の布を和服用に仕立ててもらったものです.

違いに基づく区別と差別

それはさておき，今日私が皆さんと一緒に考えたいことは，違いに基づく区別と差別の問題です．徐々に記憶が薄れてきているかもしれませんが，新型コロナウイルスが猛威を振るっていたパンデミックの時のことを少し思い出してみてください.

感染拡大に対する危機感が募る中，国と国の行き来が突然できなくなりました．当時は皆さんの先輩たちの中にも，留学に行けなくなった人が大勢いたと思います．グローバル化を進めるというこれまでの名目の下，国境は越えていくものとばかり思われていました．しかし，それが突然越えられない境界線として目の前に立ちはだかることになったわけです．さらには日本国内でも，これまで意識さえしていなかったかもしれない県の境界が突然可視化されました．そしてこれも，「なるべく越えないでね」という境界線になりました.

例えば 2020 年 7 月，岐阜県にある私の夫の実家が，周辺の水路の氾濫により床上浸水の被害を受けたことがあります．普通なら，他県に住んでいる息子が真っ先に駆け付けて高齢の母の手伝いをすることが当然と思われたはずです．しかし，その時は義母の近くに住んでいる親戚や近所の人たちから「自分たちが全部やるから来なくていい」「いやむしろ来ないで」というようなことを言われました．どのような理由であれ，他府県ナンバーを付けた車が入ってくることで，周りの人たちからうわさをされ，警戒されるという心配からでした.

当時はまだ誰もが感染経路を気にしていた時期で，都道府県別のコロナ感染者数が毎日発表されてもいました．単なる数字であるにもかかわらず，感染者数が多い都道府県の住民は何となく肩身の狭い思いをする状況だったと思います．つまり，コロナウイルスに感染した人としていない人の違いが容易に差別につながる状況だったのです.

人と人の間に違いがあるだけなら，それは単純に区別と呼ばれます．例えば災害が起こった地域に暮らす被災者と，救援に入っている支援ボランティアがいる場合．両者の間にはもちろん立場の違いがあります．だからこそ目指されているのは，違いを超えた支え合いや，協力や連帯です．しかしそれがコロナ禍での感染者と非感染者の違いになると，非感染者が感染者を差別するという事態がさまざまな場所で生まれていました．現実にはその立場が簡単に入れ替わることがあり得ると，わかっているにもかかわらずです.

また，誰もが感染リスクを小さくしたいと思っている中で，一部の人たちはリモートワークという手段を選ぶことができました．他方，社会に不可欠なエッセンシャルワークを担っているという理由で，現場での業務を続けなければならなかった人たちもいました．しかも後者の人たちのほうが，相対的に不安定で不利な処遇に置かれていたこともわかっています.

差別や格差につながる分断と「見た目」

このような差別や格差は，分断につながります．そして，日本のみならず世界中で表面化した分断は，実はすべてコロナ禍以前から

ある格差や差別に基づくものだったと指摘されてきました.

では差別や格差につながる違いのあり方とはどのようなものでしょうか.

私とあなたという２人の人間がいれば,さまざまな違いがあって当然です.たとえば住んでいる場所や,身長や体重などの体格,趣味や,得意なことや不得意なことなどなど.しかし一般には,ジェンダーやセクシュアリティ,年齢,国籍,人種などといった違いのほうが重視されがちです.さらにこれが個人間ではなく,集団と集団の間の問題になると,いま言った属性がいっそう重要な違いとしてとらえられる傾向があるのではないでしょうか.

しかも重要なのは,これらの違いがよく,目に見える違いと受けとめられがちなことです.女か男か,若いか若くないか,あるいは国籍までもが「見ればわかる」と思われやすいのです.でも,実際にそうなのでしょうか.

関西学院大学に来る前に勤務していた岡山大学で,基本的に英語のみで授業が行われる,学部レベルの国際プログラムの責任者をしていたことがあります.入学してくる学生の皆さんは,実に多様なバックグラウンドを持っていました.たとえば日本国籍を持つ両親の下に生まれ,国籍は日本ですが,18 歳までアメリカやインドネシアなどで育ったため日本語がほぼ話せない人.逆に,両親がフィリピン人でも,日本で生まれ育ったため英語よりも日本語のほうが上手で,日本国内の高校の普通科から進学してきた人.ただし国籍はフィリピンです.他に二重国籍や三重国籍の人たちもいました.

そのような学生たちが集う場所では,見た目のみで日本人と留学生の区別をすることができません.そもそも,誰が留学生といえるかを決めることすら難しい状況でした.従って私たちは,国内生と海外生,つまり出身高校が日本国内か海外かという区別を基本にしていました.国内生の中にも日本国籍以外の人が大勢含まれていました.また同じ国内生でも,普通高校から来た人もインターナショナルスクールから来た人もいます.

結局,プログラムに在籍する学生たちを一定の基準に従って区別することが非常に難しいという現実を前に,その多様性こそがプログラムの理念となりました.

ところが一般に私たちは,区別しづらい,つまり違いがどこにあるかわからない状態が苦手です.そしてついわかりやすい見た目の違いのみを頼りにして,相手のことを判断することで安心する状態に陥りがちではないでしょうか.

違いを越えるフィールドワーク

見た目の違いを根拠に引いた 1 本の線で,私たちと「あの人たち」の間に境界をつくってしまうと,私たち側の結束を高めることには役立つかもしれません.しかし,それは「あの人たち」に対する偏見や差別意識を助長する結果にもつながります.単純化された境界線や違いの認識に支えられた分断を乗り越えるためには,結局は一人ひとりが多様な属性の束から成り立っていることを徹底的に認めることから始めるしかないと思います.

そもそも文化人類学は違いから始まる学問です.私たち人類学者は,言語や宗教や生活習慣など,さまざまな違いの境界を越えた先で調査をします.これをフィールドワークと

呼んでいます.

私の場合はインドネシアのバリ島で，女性の働き方をテーマにした調査を２年にわたって行いました．バリ島では言葉はもちろん，宗教的な考え方も，それに基づくいろいろな儀礼のしきたりも違います．それこそ食べるものも着るものもすべて違う場所で，1から 10 までやり方を教えてもらいながら生活しました．この経験を通じてわかってくるのは人間社会の多様性です．「何でこんなことをするの？」，「何でこれは当たり前だと思われているの？」と疑問が浮かぶのは，相手にとっての当たり前が私の持つ当たり前と大きくずれているためです．

ただ，文化人類学のフィールドワークでは違いを実感するところで終わらずに，その違いがどこから生まれてくるのかを理解しようとすることを大事にしています．その先に，人間が社会を営むことには多くの共通性や普遍性があるという事実も同時に示そうとするのが文化人類学です．つまり，違うということは同時に同じということでもあります．

逆に誰かのことを自分とは違うと思って境界線を引いたとき，境界線のこちら側の「私たち」はみな同じだと考えてしまう．でも，私と違って洋服を着ているとはいえ，今日そちら側にいる皆さんが着ている洋服はいろいろ違うし，その服を選んだ理由もさまざまでしょう．「同じ」の中に「違い」があって，「違い」を越えた先に「同じ」もあるということを折々に振り返っていただけると良いと思います．

（社会学部教授）

2024. 11. 7（木）

違いと「育ち合い」

Timothy O. Benedict

しかし，イエスは言われた．「子どもたちをそのままにしておきなさい．私のところに来るのを妨げてはならない．天の国はこのような者たちのものである．」
（マタイによる福音書　19 章 14 節）

100 回以上読んだ絵本

今月から「違いに向き合う」というあたらしいチャペルシリーズが始まりました．そして今日のメッセージでは，このテーマについて，一人の作家の視点を通して考えてみたいと思います．皆さんは「だるまさん」のシリーズをご存知でしょうか？大変有名ですよね．みなさんも子どもの頃，読んでもらったかもしれません．私もこの本を 100 回以上子どもたちに読んだと思います．せっかくなので，もう一回読んでみたいと思います．［『だるまさんが』を読む］

思わず笑顔になりますよね．さて，皆さんはこの作家のかがくい　ひろしさんについて知っていますでしょうか．私も実はこの夏まで何も知らなかったのですが，8 月の終わりに友人から連絡があり，ちょうど神戸で，かがくいひろしさんの作品の展示会があって，「すごく感動したよ」と教えてくれたので，家族で見に行きました．今まで，絵本展示会みたいなイベントに何回か参加したことがありますが，正直，いつもあまり大した内容ではないので，夏の残暑が続く中，神戸までわざわざ出かけるのはどうかなあと思いましたが，行ってみたら，本当に感動しました．そこで，かがくい　ひろしさんについて少し紹介したいと思います．

かがくい　ひろしさん（1955-2009）について

かがくいさんは 1955 年に生まれ，2009 年に昇天しました．54 歳の時でした．短い人生でしたが，驚くことに彼は 50 歳の時に絵本作家デビューをしました．なくなる 4 年前ですね．デビューしてからその後の 4 年間に 16 作品を次々描き上げましたが，ほんな 4 年間で書いたこの絵本は今発行部数 900 万部を超えています．こんな才能のある絵本作家はその前の 50 年間は何をしていたのでしょうか？

かがくいさんは絵本作家で有名ですが，実は特別支援学校のベテラン教員でありました．そして，「だるまさん」をはじめとする絵本が，障がい児教育の現場経験から生み出

されたものでした．28 年にわたる教員生活で様々な障がいのある子どもたちと身近に接するうち，かがくいさんは持ち前のクリエイティビティを存分に発揮して，生徒一人一人に向けた教材を手作りし，また同僚と組んで人形劇団の作・演出を手掛けるなど熱心に活動しました．言葉を持たない子や，思うように身体を動かせない子の興味を惹き，楽しませるために何ができるか？模索と試行錯誤の中で日々描き溜めたアイデアノートが，のちの絵本を生み出す材料となったわけです．

例えば，かがくいさんの絵本を読み聞く子どもたちは，リズムにのって身体を揺らし，歌うように口ずさみ，ケタケタ笑い転げます．このような本の特徴についてかがくいさんは次のように説明しています．

> 「音と動きがくっついていて，小さな子やハンディキャップを背負った子など，ストーリーが理解しにくい子達にも伝わるような絵本，というのをずっと作りたいと思っていたんです．子どもたちは，擬音語や擬態語というのが大好き．音と言葉と動きがくっついているから，とってもわかりやすいのでしょうね．例えば僕が「どてっ」とい言いながら転ぶだけでも，すごく笑ってくれるんですね．そんなところから発想が湧いてきたのかもしれません．」

このように，「だるまさんが」やかがくいさんの他の本は，児童養護施設でいろんな障がいを持つ子どもたちと触れ合う中で生まれてきた作品でした．それぞれ違う特徴を持つこどもと触れ合うことで，このような素敵な本ができた訳です．

違いと「育ち合い」

この話だけでも感動しますが，この展示会に行ってさらに私の心に残ったのは，かがくいさんの子どもに対する教育の姿勢でした．彼は自分の仕事について次のように語りました．

> 「養護学校の子どもたちと関わりあう中で，本当に子どもから教わっていましたよ．仲間とよく話すのは，教えるとかいう意味ではなく，一緒に育っていくんだね，育ち合いだねって．多分，そこが僕のベースですよね．」

「育ち合い」とは，ただ違いを認めるのではなく，お互いを深く理解し，共に成長するための心の在り方です．この話から分かるようにかがくいさんは子どもたちにただ教育を提供していたのではなく，一人一人の生徒に心から向き合っていました．展示会にもありましたが，養護学校から卒業する生徒一人一人に手書きの手紙とその子供が喜びそうな絵をかいていました．とても大変な作業でしたが，それがかがくいさんの考え方でした．

どれだけ彼が児童を大切にしていたかはこの展示会を通して初めてわかりましたが，ここで特に注目したいのは，彼が違いを持つ児童に「向き合っていた」ということです．今月のテーマは「違いに向き合う」ですが，私はこの後半の「向き合う」が大きなポイントではないかと思っています．私たちの社会は障がいを持つ子どもや，自分と少し違うと思うような人を認め，口先では大切にしようとする社会ではありますが，違いを持つ人と本当の意味で「向き合う」社会ではありませ

ん．なぜなら，向き合うと言うことは相手の存在をただ認めることではなくて，その関係から自分の弱さに気がつき，育つことです．つまり，「この向き合う」という言葉はかがくいさんの「育ち合う」にとても似ていると思います．

ただの「Diversity」を超えて

例えば社会では（関学でもそうですが）「Diversity」を重視するというような綺麗事がよく言われますが，私はこの言葉はあまり好きではありません．これはただ色々な人がいること，そしてその人は大切であることを認めるだけです．ただの多様性です．これは特に努力も要りません．私たちが何もしなくても多様性はあるからです．それより重要なのは，いろんな違いを持つ人と私たちが向き合う作業だと思います．そして，この向き合う作業というのは相手をただ大事にするということではなく，相手から学んで，かがくいさんが話すようように「育ち合う」ことではないかと思います．しかし，そう簡単なことではありません．

かがくいさんは学生時代，大学寮のベッド脇に次のようなメモを貼っていたようです．ドイツにある，ベテル修道院の修道女が残した言葉を自筆でメモをしていました．この修道院は知的障害や精神疾患を持つ子どもケアする教会でした．そして，そこにいる子どもたちについての言葉でしたが，この言葉は彼にとって，生き方の指針でもあったようです．

> *「効果があればやる．効果がなければやらないという考え方は合理主義と言えるでしょうが，これを人間の生き方に当てはめるのはまちがいです．この子どもたちはここでの毎日毎日が人生なのです．その人生をこの子供達なりに喜びを持って充実して生きていくことが，大切なのです．わたしたちの努力の目標もそこにあります．* ―ベテル修道女の言葉

私はこのメモを見た時，その言葉は心に刺りました．*「効果があればやる．効果がなければやらないという考え方は合理主義と言えるでしょうが，これを人間の生き方に当てはめるのはまちがいです」* 私も仕事でも私生活でもこの効果的な考え方になりがちです．しかし，この考え方はとても貧しい考え方だと思います．効果があるないと関係なく，かがくいさんのように違いのある人と「育ち合う」姿勢があるからこそこのような素晴らしい絵本が生まれるのではないかと思います．

（宣教師・社会学部准教授）

2024. 11. 12 (火)

Making a Positive Difference in the World

Vivian Bussinguer-Khavari

> "Teacher, which is the greatest commandment in the Law?" Jesus replied : "'Love the Lord your God with all your heart and with all your soul and with all your mind.' This is the first and greatest commandment. And the second is like it : 'Love your neighbor as yourself.' (Matthew 22 : 36-39)

Introduction

We can observe much differences in the world today. Contrasting views on fashion, politics, hobbies, cultures, religions, ideologies, and so on, seem to be bombarded through the media and through daily interactions. Many times, these differences cause division, misunderstandings, anger, negativity, and unforgiveness ; causing people to complain, judge, misinterpret, and react in negative ways toward each other. But are differences that bad, after all?

Diversity

A Chinese proverb says : It is better to light a candle than to curse the darkness. If everyone was exactly the same, thought exactly the same, lived in exactly the same way, ate the exact same food, dressed the exact same clothes, wouldn't life be pretty boring? Wouldn't it be harder to find our place in the world? We would most likely walk around with no sense of purpose, no sense of belonging.

Diversity brings flavor to the world. It triggers care, empathy, compassion, understanding, sharing, helping, and forgiving. Everyone is different, everyone is unique. We must find a way to make a positive difference in the world.

It is said that some people light up the room when they enter. Others light up the room when they leave. Which one are you? We don't all have to be exactly the

same to live happily together as a society. We can all be unique and still live in peace and harmony. The truth is that we all need each other, so let us bring joy wherever we go.

Community

Throughout life, aren't we always supported by our family, friends, teachers, neighbors, coworkers, etc.? For example, the train master who conducts the train for you to commute to school, the bus driver who drives you to our beautiful campus, the cooks in the cafeteria who lovingly prepare your meals, the farmers who grew the vegetables on your plate, the classmates who help you study for the test, the librarian who helps you find a book you wish to read, the teacher who explains the course content you cannot understand, the friend who gives you company and cheers you up when you are feeling low, your parents who give you advice and financial support... The amount of people who come together to support each one of us daily is countless. If we consider each step of our daily routine very carefully, we cannot help but realize that we are not alone. Instead, a multitude of people joins us every step of the way to ensure that we can function and strive in our activities.

Society

Our physical body is being supported by every cell. If one part of your body is in pain, all of our being suffers : You cannot study, you cannot sleep, you cannot be comfortable when you are in pain. If one cell in our body is sick, it affects every other cell. All it takes is one bad cell to grow, expand and negatively affect other cells into growing badly too. Before we know it, we have a cancer that spreads and destroys everything.

In the same way, our lives should be a good cell in this society. Each person, each family is a cell. If we are happy and healthy, we create a positive, thriving society. If we are sad or sick, we create a destructive society. Therefore, we must respect ourselves, respect others, find strength in our differences, and bring light and joy to everyone we meet, wherever we go.

Responsibility

Our responsibility is to make a positive difference in the world. Here is how we can go about doing so :

1. Know what is good and what is bad, what is right and what is wrong
2. Work on ourselves to become a better human day by day
3. Be observant : Find a cause to fight for, find people to help

If we find it difficult to do the things listed above, maybe there is something blocking us. Here are some questions we can ask ourselves to check our heart :

1. Are we being selfish?
2. Are we losing hope?
3. Are we having too much pride?

Conclusion

For us to make a difference in this world, we must maintain a positive mindset, we must be hopeful for the future, we must live in the present, and we must treasure the now. We must not waste time reliving the past. No matter what we do, the past cannot change itself. Therefore, we should not waste our energy on it.

Jesus taught us to love our neighbor as ourselves. That means we should wish for the success of others as much as we wish for ours. We must care for others as much as we care for ourselves.

Love God. Love yourself. Love your neighbor. Together we can create a better world for all!

（社会学部准教授）

2024. 11. 14（木）

性の「違い」のリアリティを知り，排除にあらがう

武　内　今日子

性の多様性とキリスト教の交差性

今年から関学に来ました，武内今日子です．「セクシュアリティ論」や「クィア・スタディーズ」などの授業を担当しています．私はいわゆる性的マイノリティ，つまり性における「ふつう」とされる価値観から外れて生きている人たちの経験について研究しています．具体的には，とりわけ出生時に割り当てられた性とは異なる性を生きているトランスジェンダーや，男女どちらかには当てはまらない性を生きているノンバイナリーの経験を調査しています．

このチャペルという場で，性的マイノリティについて研究している私が話すのは，少しだけ不思議な感じもします．キリスト教には性の多様性を積極的に肯定してきたとは言いきれない部分もあり，その中で生き延びてきた当事者たちの運動の歴史を教えているからです．たとえば，1980 年代に HIV/AIDS の感染症が猛威をふるったとき，アメリカでは多くの当事者が，AIDS への対策をしない政府に対してだけでなく，コンドームを使った安全なセックスの仕方を含む性と生殖の権利について教えようとしない教会にたいして抗議活動をおこないました．

しかし，キリスト教は性的な「違い」を尊重せず抑圧してきたという単純な見方をすることもできません．研究者はいかに聖書やキリストの身体を，「ふつう」の性という価値観とは異なる解釈にひらいていくかを，クィア神学という領域で検討し続けてきました．そしてクリスチャンの中にも，性的マイノリティはつねにいます．しかし，性的マイノリティでありかつキリスト教を信仰していることは，クリスチャンのコミュニティの中でも，性的マイノリティのコミュニティの中でも語りにくかったと言われています．

たとえば，私は日本で最初期に，つまり 1990 年代頃から活動しているトランスジェンダーの男性と話したことがあります．彼はキリスト教ではない新興宗教だったけれども，なんでも「言いっぱなし聞きっぱなし」で話していいという前提があるコミュニティでも，信仰をもつことはもっとも語りにくいことの一つだと言っていました．それには，信仰をもつことが日本においてあまり肯定的に語られないことが影響しています．それだけでなく，その人のトランスジェンダー性は，性別違和などではなくて，信仰や何かしらのスピリチュアルなものからくるまやかしで，本当のトランスジェンダーじゃないのではないか，と批判されるのを彼は恐れたのだそうです．

意外でしょうか．マイノリティに位置づく人だったら「違い」に敏感で他の人に偏見を持たないだろうというのも，ステレオタイプ的な理解の一つですよね．私たちは一つの「違い」を生きているわけではありません．人種や階級，信仰，性のあり方，それぞれの「違い」が関わりあうことで，居場所を見つけること，自分が何者かを解釈することが難しくなることだってあります．これを学問的には，インターセクショナリティ，交差性と呼んでいます．私自身，自分が人と違うということに悩み続けてきた人間ですが，近しいと思っていた色々なコミュニティに属してからも，信仰の語りにくさを含め，尊重できていなかったそれぞれの「違い」のリアリティを新たに知っていくことの繰り返しです．

トランスジェンダーの生活のリアリティと偏見

こんなふうに「違い」は複雑にかかわりあっているのですが，その「違い」にかんするリアリティを多数派に属する人々がいかに排除し，抹消してしまってきたかということも，知ってほしいと思います．たとえば，さっきからトランスジェンダーやノンバイナリーと言っていますが，皆さんがトランスジェンダー，ノンバイナリーと聞いて思い浮かべるのはどんな人たちでしょうか．ホルモン療法や手術を経て，男性あるいは女性としか見えない性別に完全に移行している人でしょうか．「女装した男性」や「男装した女性」というメディアで醸成されてきたセンセーショナルなイメージに引きずられている人もいるかもしれません．ノンバイナリーに至ってはどんな人たちかイメージも湧かない人もいるでしょう．

実際には，トランスジェンダーやノンバイナリーたちの性のあり方は非常に多様です．トランスジェンダーの中でも，手術している人もいればしていない人もいるし，性別を移行している途中で男女どっちつかずな見た目の人もいれば，医療を使って身体を加工しなくても服装などのジェンダー表現だけで出生時とは異なる性を生きている人もいます．男女どちらかとしてしか周りからは見られないけれども，その人のアイデンティティはノンバイナリーで，男女どちらかにひとまず「擬態」して生きることだってあります．

こんなふうに「違い」というのは人の数だけあるようなものなのに，頻繁に単純化され，さらに排除のために持ち出されているのが現状です．皆さんがよく見ている SNS やテレビの中でも，排除的な語りは多く出てきます．その中では，たとえば，トイレなどの性別分けされた空間をトランスジェンダーたちがいかに利用すべきかを，トランスジェンダーの身体のあり方から判断しようとするものも含まれています．手術している人だけが性別分けされた空間を利用できるといった具合ですね．

しかし皆さんには，ぜひ冷静になって，トイレなどの空間がどんな「違い」によって分けられているのか，そして多様な性別移行の状態がありうるトランスたちが実際にどんなふうにトイレを使ってきたのか，そのリアリティを歪めずにちゃんと見てほしいと思います．トイレは明らかに，性器のような身体の性的特徴の違いによっては分けられていません．むしろ外見からぱっと見で判断される性のあり方，外見の違いによって曖昧な仕方でバイナリーに分けられています．誰もトイレ

に入るとき，性器をチェックされることはなく，戸籍を見せることもないわけですよね．トランスやノンバイナリーたちは当然，トラブルなく安全に排せつを終えたいので，1980年代くらいからずっと外見上自分がどう判断されるかを考えて，男性トイレ，女性トイレ，多目的トイレを使い分けてきたのです．そして私たちの大半のシスジェンダーの女性や男性たちは，トランスの女性や男性，ノンバイナリーが同じトイレを使っていることに，別に気づくこともなかったわけです．それなのに，トランスジェンダーが利用できるトイレの線引きをこれから考えましょうと議論しようとするなんて，トランスたちの生活のリアリティをまったく考慮していません．トランスジェンダーは，単なる抽象物で好き勝手に議論できるようなものではなく，つねにすでに現在の社会的につくられた制度的環境を生きているということを，忘れないでほしいです．

「違い」から連帯する／「違い」を生き延びる

そして私たちに必要なのは偏見に基づく排除ではなく，互いの「違い」を認め，それを連帯のとっかかりにしていくことだと思います．女性ひとつとっても，大多数のシスの女性と，トランスの女性，ノンバイナリーだけれど生活上女性として生きざるをえない人，異性愛の女性と，同性愛の女性，黒人やラテン系，アジア系の女性などさまざまな「違い」があって，みんな「女性」ではあるけれども，その経験や困難のあり方は同じではありません．そのリアリティは何度でも確認しないといけないでしょう．しかし同時に，制度的環境がもたらす困難には，似通った，類縁的なところだってあります．シスでもトランスでも，女性として社会的に生活している人の方が，女らしさという役割行動を求められたり，性暴力の被害にあいやすかったりします．「違い」を知りつつ，性差別のない社会といった目標に向かって，ともに闘っていくことができるはずだと思っています．

最後に，学生のみなさんの中には，マイノリティの側に立っていて，切実に他者との「違い」を感じながらも何とか生き延びる術を探していこうとしている人もいると思います．トランスの人も，同性愛者も，アセクシュアルやアロマンティックの人もいるでしょう．どうか絶望しないで生きてほしいと思います．自分と同じではなくても，類縁的な関心を共有できる場を見つけてほしいです．私の場合がそうでしたが，学問も，困難を言語化し，過去と現在とのつながりを見出し，生きのびる助けとなります．みなさんには「違い」を分断や恐怖をあおるために持ち出すのではなく，それぞれの「違い」がどのように生きられているのかを見つめ，連帯につなげていってほしいと願っています．

（社会学部助教）

2024. 11. 19（火）

「違う」被災者の「普通」の暮らしを支援する大学生

関　　嘉寛

被災者とボランティア

私は大学時代，ボランティアがそれほど好きではありませんでした．では，なぜ今はボランティアを専門としているのでしょうか．

阪神淡路大震災が起こって，来年の１月で 30 年になります．１月 17 日の朝５時 46 分に地震が起きました．私は大学院生で，その日は修士論文の提出日でした．実は，提出日にもかかわらず書き終わっていませんでしたので，地震が発生した時間も起きていました．当時は豊中に住んでいて，朝５時半前後に休憩している時に大きな揺れを感じました．多くの人の人生を変えた阪神淡路大震災の発生した瞬間でした．

社会の中でボランティアはもちろん人の助けになりますが，ボランティア活動においてもさまざまな関わりや気付きもあると思い至りました．そのため，今はボランティアを専門にしています．

ボランティアの中でも今回のテーマの「違い」に関わる出来事が数多く起こっています．ボランティアでは，そもそも自分の日常では出会わない人と会います．例えば子どものボランティアでは，子どもがいない人も子どもにボランティアをします．高齢者や障害を持った人たちもいます．今日は，被災者を支援するボランティアについて話をさせていただきます．

先日，週末の 11 月 16 日と 17 日に能登半島にある穴水町に行ってボランティア活動をゼミ生と一緒にきました．そこで，ある被災者に，「君らは帰るとこがあるやろう」と言われました．まさにそうなのです．被災者でもなく，被災地に住んでいるわけでもない私たちには，暖かい家があり帰る場所があるのです．そんな私たちに，一体何ができるのでしょうか．今日はそのことについて話したいと思います．

被災者や被災・災害という言葉を聞いて，皆さんはどのようなことを思い出しますか．私が最初に災害や被災地という言葉を聞いたのは 30 年前です．しかし実際に現地に行ったのは，今から 20 年前に新潟県で大きな地震があった時です．最初は，特別な場所に行って緊張しっぱなしでした．大阪から今はない夜行列車に乗って，８時間ほどかけて新潟県長岡市に着きました．道中，なかなか寝付けず，「どうしよう，被災地に着いたら自分はどんなことを試されるのか」と思っていました．

しかし行って被災者に会ってみると，当たり前ですが，被災者と言っても地震が起こる１秒前までは，私たちと同じ普通の生活をし

ていた人ということに気づきました．普通のことを考えて，普通にお酒を飲んで食事をして会話していた人です．被災者にボランティアをする場合，自分とは「違う」存在に対面しているわけではないということに，まず気付かなければいけないことに気付きました．

被災者を支援するとは

私たちが被災者とで会ったとき，その人たちに何ができるかを考えます．すぐに浮かぶのは，例えば食事ができないため炊き出しをすることや，物がなくなっているため物資を提供することです．そのように，まずは目に見えて困っていそうなことを支援する活動が浮かびます．

災害が起こると皆さんが行っていろいろなものを提供して，いろいろなお手伝いをします．しかし，それは継続的に必要なものではありません．津波でぬれた服は乾かして着ることができます．あるいは，服も十分な数をもらえると，それ以上は要りません．食事も自分で作れるようになると提供する必要もありません．では，その人たちへの支援は終わりなのでしょうか．それが問題です．

衣食住だけ足りたら十分なんていう生活をみなさんも送っていないですよね．被災した人たちも被災前はそうでした．つまり，自分たちの生活に必要な，なくては困るものはいろいろとあるということです．例えば安全や健康などです．なので，私たちは安全や健康につながる支援もしていかなければなりません．

さらに，もう一つ重要なことがあります．例えば私は，常に派手な服を着て歩いています．このような服が欲しいと言っても，恐らく支援物資にはありません．でも，私は欲しいのです．自分で手に入れるとなると，好きな服を選ぶことができる環境が必要になってきます．自分らしく生きる選択肢が増えてほしいと思います．被災した人も，自分らしい生活や自分だけの選択ができるようになるために，私たちもそれぞれの人に向き合って一緒に考える必要があると思いました．食事や不足している服は数で分かってしまう部分があります．しかし，一人一人が望む服や食事や生活については，それぞれの人に向き合いながら考えていかなければいけないのです．

このような考え方は，「それはぜいたくではないか」，「自分でやったらいい」という反論もあると思います．被災した人たちの多くは，時間の差はありますが，自分で自分のことをできるようになります．その一方で，被災したことによって必要なものが手に入らなくなって，その上で自分がやりたいことを見つけられない人たちもたくさんいます．具体的には，例えば若者や高齢者，あるいは経済的に苦しい方々，場合によってはジェンダー的な偏りなどもあります．

能登半島地震への支援とは

このようなことを思いながら，能登半島の穴水町に行きました．半島の先にはニュースによく出る輪島市があって，東側には珠洲市があります．その下に能登町があって，奥能登の少し手前にあるまちが穴水町です．穴水町では大きな被害がありました．1月1日の発災から約11カ月がたって，崩れた家の解体がようやく少しずつ進んでいます．外から見ると，まちが次の一歩を進むように思います．

解体が進んでさら地になって，仮設住宅の皆さんは次の家を建てやすくなります．大変な思いはしているけれども，次のステップに進めて希望を持てると思いました．しかしある方から，「もう絶望しかない」という言葉を聞きました．その人から，「借金をしてまで元気が戻らない町に住み続けるのか」といわれ，答えに窮しました．特に高齢者はこれ以上借金ができなくて，ここには住めなくなります．その意味で，絶望感がある中での暮らしであることを知りました．私たちはこのような人たちの自分らしい暮らしの再興を支えていきたいと思います．

大学生と災害ボランティア

最後に，今日皆さんに最も伝えたいことです．いろいろな「違い」がある中で私たちは活動しています．大学生が行くことには大きなメリットがあります．能登半島には大学がないため，当たり前ですが大学生がほぼいません．非常に珍しくて，皆さんが大変関心を持って話をしてくださいます．そして，大学生には時間的な余裕がある人が多いため，非常にゆっくりと付き合えます．「次に別の作業があるからでは失礼」という感じではありません．

そして，これが非常に重要なことです．私たちは「何かしてあげよう」と思って支援に行きますが，大抵は相手にいろいろなことを教えてもらいます．被災者自身の就職や恋愛や人生についていろいろな話を聞くことができます．そのように個別的なコミュニケーションがあって，大変親密な関係ができあがります．それはその人の自分らしい生活を作り直すきっかけになると思います．

災害ボランティアはいろいろな側面を持っていて，さまざまな方がいます．その中心にあるのは，「暮らしはみんなと同じで普通だ」ということです．今日は，「その普通を支えるために皆さんがどのように関わることができるか」について話をさせていただきました．

（社会学部教授）

2024. 11. 20（水）

共生を考える

貴 戸 理 恵

兵庫県知事選挙に寄せて

「現代若者子ども論」「教育社会学」の講義を担当しています．今回のチャペルでは，「違いに向き合う」という題目を頂きました．何をお話ししようかと考えましたが，少し政治の話をしたいと思います．

11 月はアメリカ大統領選挙があり，共和党のトランプ氏が次期アメリカ大統領に選出されました．投開票時には「内戦が起きるのではないか」と心配されるほど，アメリカ国民は真っ二つに割れました．前回バイデン大統領が勝利したときには，「不正選挙だ」と主張するトランプ支持者が暴徒化するなど大きな混乱が起きたこともあり，警戒が高まっていました．

日本でも，つい先日兵庫県知事選挙がありましたね．投票に行かれた方も多かったのではないでしょうか．ご存じのように斎藤元彦氏が再選しました．内部告発文書の扱い方が不適切だったとして議会から不信任決議案を出されて失職していました．重要なことは，百条委員会はまだ続いており，事実関係は明らかではないということです．

この選挙戦ではインターネットが活用され，若い世代の無党派層の取り込みに成功したとされる一方で，ネット上では誹謗中傷により分断や対立が煽られ，逮捕者も出る事態になりました．新聞やテレビなどのマスメディアの限界があらわになり，「リベラル」と言われる人びとのあいだに衝撃が走っています．

立場が違う人とどう対話する？

皆さんは，選挙に行かれましたか？　どこで，どんなふうに情報を得られましたか？お友達や家族と話をしましたか？

「斎藤さんはパワハラなんかしていない，むしろ百条委員会やマスコミに悪者に仕立てられた被害者なんだ！」と言ったら両親に「何を陰謀論にかぶれているんだ，お前はネットなんか信じないで新聞を読め」と言われて「話通じないな」，という経験をした方もいらしたかもしれません．逆に，親しかった人が「斎藤氏を追い込んだのは朝日新聞などリベラル系メディアの陰謀だ」と言い始めてドン引きした，という人もいるかもしれません．もちろん，ネットに流れてきた情報を見て，何となく判断した，という人もいるでしょうし，何の話？というそもそも興味がない人もいるでしょう．

ひとつ申し上げたいのは，少なくとも新聞の情報は何重にもファクトチェックがなされ

ていて，記者が取材し，デスクが目を通し，校閲や校正が緻密なチェックをすることによってはじめて活字になる，ということです．もちろん，だから間違わないというのではないですが，その点で，誰でも発信できるインターネット上の情報とは異なります．

また，「裏に誰かの意図が働いているから，表面に現れた情報は信用できない」という陰謀論は，実証も反証もできない点で，科学ではありません．科学的であるというのは，「真実だと証明されたたった一つの事実」ということではありません．反証に開かれているということ，つまり，別のデータが出てきたら，それに基づいて考えを変えることができる，ということが科学なんです．「誰かが意図をもって操作している」という話は，嘘か本当かを経験的に明らかにするすべがありません．したがって反証もできません．信じるか，信じないかになってしまい，信じている人と信じていない人とでは対話ができなくなります．

日本もこれから，政治的な対立のなかで人々が二つに割れ，両者が話のできない社会になっていくのでしょうか．今回の兵庫の知事選は，ひとつの地方選挙ですが，これからの日本社会の行方を占うような選挙である，という感じを持った人は少なくなかったと思います．アメリカや，ブレグジットのときのイギリスのように，政治的立場が異なる立人とは家族や親戚でも論争になってしまって口をきけない，という事態が，この先日本でも起こってくるかもしれないのです．

ヒントとしての「壁の向こうの住人たち」

そうならないために，どうしたらいいのでしょうか？

自分の立場の主張を並べ立て，相手を馬鹿にし，論破しようとするのでは，対立は深まるばかりです．かといって「面倒な話題には触れない」としてしまえば，同じ場所に居ながら実はともに生きてはいない，ということで別のかたちでの分断が進むでしょう．

そこでご紹介したいのは，アメリカの社会学者アーリー・ホックシールドの『壁の向こうの住人たち』という本です．副題は「アメリカの右派を覆う怒りと嘆き」とされています．

2017 年のトランプ大統領の誕生の背景を説明する本として注目されました．

ホックシールドは『セカンドシフト』や「感情労働」という概念で有名な社会学者ですね．アメリカには「ティーパーティー」と呼ばれる共和党保守層の草の根保守運動があって，トランプ支持者になるわけですが，ホックシールドは 8 年かけてルイジアナに通い，ティーパーティーの参加者にインタビューしました．

ルイジアナは，石油化学工業のおひざ元です．企業がやりたい放題で環境汚染がひどく，土壌も緩んで家が陥没したりしていました．普通に考えたら政府の規制をもっとも必要とする人たちなのですが，なぜか政府の介入を嫌う保守になっていくのです．

ホックシールドは，「なんでなの？あなたたちは頭がおかしいの？」という態度ではなく，丁寧に関係を作りながら，なぜ共和党支持になるのか話を聞いたのです．

そうしたら，そこには「ディープストーリー」があることが見えてきました．

「山のてっぺんにはアメリカンドリームがあって，そこにたどり着くために長い行列にならんでいる．労働は過酷だし健康被害もあるが，教会や家族で助け合ってがんばっている．それなのに，割り込んでくるやつらがいる．女性や黒人や移民や，保護すべきペリカンなどが，自分の前に堂々と並んでいる．ずるいじゃないか．どうして政府は日々こつこつがんばっている自分たちを差し置いてやつらを優遇するのだ．そういう気持ちを持つことを，差別主義者だとさげすむ都市部のリベラル．わかってもらえない，悲しい，悔しい．」

つまり，そこには「痛み」が存在しているんですね．

もちろん，差別は決して許されるものではありませんし，環境への取り組みは大切です．でもホックシールドは，リベラル層がそのことを主張するだけでは溝は埋められないと言います．相手がどのような「痛み」を抱えているのか，それを関係性のなかで共感的に理解することで，その「痛み」が極端な政治的主張に水路づけられていく回路をずらすことができるのではないか，と言うんですね．

主張の向こうの「思い」に耳をすます

この話から，分断に橋を架けるために何をすればいいかというヒントが見えてきます．それは，相手を一人の人間とみて，自分とは異なる強い政治的主張の奥に，どんな思いが横たわっているのか，そのディープストーリに耳を澄ますことです．どこかから借りてきた言葉の応酬で相手を論破しようとするのではなく，互いの立場を尊重しながら正直な自分の言葉を交わすことです．それは時に受け入れがたい気持ちになる苦労の多い営みかもしれませんが，多様な政治的立場を持った人と，本当の意味で共生していくには，必要な営みだろうと感じています．

（社会学部教授）

2024. 11. 26（火）

他人の心の読み違え

岩 谷 舟 真

暗黙のルールを読み間違える

社会心理学を担当している岩谷です．実は，社会心理学はダイバーシティなども研究範囲に入っています．ダイバーシティでは，さまざまな違いがある人がいる場合と同じようなメンバーがいる場合で，成果がどの程度違ってくるかについて研究されています．その違いは大きく分けて２つあります．１つは目に見える違いで，例えば人種や性別などです．もう１つは目に見えない違いで，自分が思っていることと相手が思っていることが違っていることなどが挙げられます．私は社会心理学の研究の中で，相手の心を読んで行動することについて興味を持っています．今日は，相手の心を読み違える場合があるということについて話をしようと思います．

例えば授業中に教員から，「何か質問がある人」と言われたとします．自分は分かっていないため手を挙げたいけれども他には誰も手を挙げていない，といったことが今までにあった人もいるでしょう．そのとき，恐らく他の受講生は授業を分かっていて自分だけが授業を理解していないという違いに直面します．しかしながら，それはあくまでこちらの推測です．もしかすると他の人も自分と同じで授業内容をあまり理解しておらず，自分だけのために質問を受けてもらうのは悪いと思って手を挙げるのを遠慮しているのかもしれません．本当は分かっていないけれども一人一人が相手のことを思い合って，周りの空気を読んで手を挙げないという奇妙なことが起こるのです．

ここで起こっていることは，手を挙げないという暗黙のルールに自分自身は賛成していないけれども，恐らく他の人は賛成しているという間違った予想です．自分一人ではなくて，集団で多くの人がそのように予想してしまっている状況のことを，社会心理学では多元的無知といいます．裸の王様にも近いです．自分自身は王様が服を着ていないと思っているけれども，周りには服が見えていると思って指摘できない状況です．

今はこのような奇妙な状況が起こる理由について研究中で，いろいろな理由があると思います．一つは，「1 人だけ手を挙げると授業を遅らせてしまうかもしれない」，「目立って周りから嫌われてしまうかもしれない」と思って行動に移せないという理由です．もう一つは，メンツのようなものもあるのではないかと思っています．授業中に手を挙げる行為は，自分が分かっていないことを周りに知らせることでもあります．自分の能力が低いことが知られてしまうため，手を挙げにくい

という理由もあると思います．

嫌われないためにルールに従う

評判やメンツを気にしてしまうことにはさまざまな社会環境が関係していると思います．例えば大学１年生の最初の段階では，新歓が多いと思われます．今のコミュニティーでうまくいかなくても，別のサークルに入って新しい人間関係をつくることができます．そのようなセーフティーネットがあるため自分が思ったとおりに振る舞って，仮に嫌われると別の集団に行くことができます．

一方で，大学生活の後半に差し掛かるとそれほど新歓にも参加しないため，人間関係も落ち着いてきます．サークルやゼミなどのメンバーとしか遊ばない状況になってくると，その中で嫌われてしまった時に，別の集団に行って新しく探すことが相当難しくなります．人間関係が固定される状況が，「嫌われたくない」という気持ちを強めて，その結果，「授業中に手を挙げない」などのルールにとりあえず従っておくといった無難な行動をさせるのではないかと考えています．アメリカと比較して，日本人は大勢と関わる機会が多くなく，そのため，無難なルールに従う行動をとっていると思っています．本当にルールに従いたいと思っていれば問題ないのですが，場合によっては，自分はルールに従いたくないけれどもとりあえず従っておくというケースも多々あると思っています．

今は授業中の質問の例を挙げました．もしかすると，みんなでバスに乗っているけれども自分は徒歩で帰りたい日もあるかもしれません．食事に行って，みんなはアルコールを頼むけれども自分はノンアルコールやジュースが飲みたい日もあると思います．この時に自分だけが違うと考えて，とりあえず暗黙のルールに従うこともあると思います．しかし，もしかすると周りもそう思っているかもしれません．それが，まさしく多元的無知です．徒歩で帰りたいと言うと周りから悪く思われると思って，とりあえずバスに乗るけど，実は仲間の全員が「徒歩で帰りたい」と思っていたということも，多々あると思われるわけです．

今日は多元的無知という概念を知っていただいたつもりです．今思っている違いは，自分だけが思っていることなのでしょうか．他のメンバーも同じことを思っている可能性があることも知っていただきたいと思います．

メンツを守るためにルールに従う

一つは周りから嫌われるかもしれないという例でしたが，もう一つはタフに生きるというか，弱く思われたくなくて無理をするという例です．アメリカ南部には名誉の文化というものがあります．昔のアメリカ南部は辺境地で，人口が少なく法律による監視の目もうまく行き届いていませんでした．牧畜が盛んですが，自分や家畜を法律が守ってくれないため自らが守らなければいけない状況です．そのため，相手から「ばか野郎」と侮辱された時には自分を守るためにしっかりと反撃します．自分の名誉を保つためには暴力も振るってよいというカルチャーがありました．

しかしながら，そのようなカルチャーが有効だったのは法律が整備されていなかったためです．自分や家畜を自らが守らなければいけない環境があったため暴力をもってやり返すという戦略が有効だったのです．今はしっ

かり法律による監視の目もあって，家畜を育てている人も少ない状況なので，名誉を守るために暴力を振るう必要性が薄れています．

ただアメリカ南部では，現在でも自分の名誉を守るための殺人事件などがアメリカ北部と比べて多いというデータがあります．アメリカ南部の人はアメリカ北部の人よりも暴力的なのでしょうか．アンケートをしてみると，暴力を振るいたいと思っているわけではなく，相手が暴力を振るってくると予想して，それよりも先に暴力を振るっているという様子が見えてきます．

繰り返しになるのですが，アメリカ南部の人は暴力に賛成というわけではありません．「相手が暴力を振るってくる」というのは幻想です．そのような間違った予想をして暴力行為をしているため，アメリカ南部では暴力事件が多いということが示されています．一人一人が間違った予想をしている点で，まさしく多元的無知と言えると思います．

違いを吟味する

このように，自分の評判やメンツを守るためにルールに従うなど，いろいろな形があると思っています．多元的無知概念とは，自分が少数派と思っていたけれども実はそうではなかったというものです．自分は少数派で周りと違っていると思った場合も，実は勘違いかもしれないと希望を持っていただきたいです．アメリカ南部の暴力の例でも顕著ですが，「自分とは違う集団の人は，自分とは違う心を持っている」という考えは勘違いの可能性もあります．本当は暴力を振るいたくないけれども，「相手が暴力を振るってくるかもしれない」と予想することによって，アメリカ南部では暴力事件が多くなっています．自分とは別の行動をしている集団は「違う」とそのまま受け取るのではなくて，一人一人を文脈から切り離してみてください．そうすると，もしかすると自分たちとそれほど変わらないかもしれません．そのことを知ってもらいたいと思いました．

（社会学部専任講師）

2024. 11. 27（水）

向き合うべき「違い」は（それほど）ない

安 達 智 史

1．向き合うべき「違い」は本当に存在するのか？

本日は，共通テーマである「『違い』に向き合う」を話題に話をさせていただきます．ご存じの方もいるかもしれませんが，私はイギリス，マレーシア，日本をフィールドとして，ムスリム（イスラーム教徒），とくに女性の研究をおこなっています．

私がこのテーマで講話を依頼されたのは，日本においてムスリムはマイノリティであり，また人々にとってかなり異質な宗教に映ることが理由かと存じます．つまり，そうした「違い」をもつ宗教や人々との向き合い方について，私の経験を踏まえつつ話すことが期待されているのだと思います．ただ，私は社会学者であり，つまり「当たり前の前提を問いなおす」学問を専門としているので，共通テーマについてやや異なった視点から話をします．そこで，本講話では，「向き合うべき『違い』は本当に存在するのか」を問いに議論をいたします．

この問いは，私が日頃，学生と話をするときに抱く感想に由来しています．学生のみなさんは，文化の「違い」がとても好きで，それを学びたいと思っている（少なくともそのように説明する）わけです．たとえば，演習の募集や留学の面接をすることがありますが，その際，多くの学生は「文化の違いを学びたい」や「異なる文化をもっと深く知りたい」と発言されます．それを聞くと私はいつも「イヤー」と声を漏らしそうになり，なんとも言えない気持ちになります．私の頭によぎるのは，「頑張って学ぶほどの違いってそんなにあるのかな」という疑問です．

たしかに，それぞれの文化には，ユニークな特徴があるようにみえます．たとえば，私が研究するムスリムに目を向けると，女性はヒジャブ（スカーフ，ヴェール）を着用する人が多く（国や地域によって異なりますが），ラマダンという断食やハラールといった食事をめぐるルールが存在します．その意味で，確かに「違い」はあるわけです．しかし，それは本当に「向き合う」ほどの違いでしょうか．食べるものが異なる，服が異なるということは，同一の社会のなかでも当たり前に存在することです．その他の振る舞いについても同じです．私も，学生と接するとき，「えぇ」と困惑することや，自身のパートナー――日本人なわけですが――との間でさえ，「マジかよ」と声に出すことが多々あります．文化的な慣習も，そういった違いの一つではないでしょうか．

あるいは，文化の違いは，そうした習慣だ

けでなく，価値観の違いをも意味すると主張する人がいるかもしれません．たとえば，日本人との対比でよく例に出されるのが，外国の人は時間を守らないといったことです．あるいは，イスラームに関してよく聞くのが，女性の権利や女男の平等が認められていないといった意見です．サウジアラビア，イラン，アフガニスタンといった国のニュースを耳にすると，たしかに女性の権利が制限されているようにみえます．ただ，それは宗教が原因なのか，という疑問もあるわけです．というのも，多くのイスラーム社会では，女性の進学率は男性を上回っています．私の研究対象であるマレーシアではとくにそれが顕著で，エリート大学である国立大学の学生の女男比率は 6〜7 対 4〜3 となっているわけです（女性が 7 であり，その逆ではありません！）．またマレーシアの女性たちは就労にも意欲的で，結婚や出産後も働きに出ます．それに対して，日本はどうでしょうか．少なくとも教育については圧倒的に男性が優遇され，それはとくに高等教育へのアクセスについて顕著にみられます．

2.「違い」は何に由来するのか？

ここで，社会学部のみなさんが考えなければならないことは，その「違い」は本当に「文化」によるものなのかという点です．人あるいは動物や植物には「個体差」が存在することは，みなさんご存じだと思います．大きい／小さい，俊敏／鈍重，器用／不器用など．だとすれば，文化差も，個体差の原因の一つにすぎないと考えられます．個体差を生み出す要因は，その他にも多数あります．たとえば，女性／男性というジェンダー差，農村／都市出身といった地域差，労働者／中産階級といった階層差，年齢差や世代差，あるいは接触するメディアといった経験差もあります．

具体例として「時代」についてみてみましょう．昨年（2024 年），クドカン脚本，阿部サダヲ主演の『不適切にもほどがある！』というドラマが話題になりました（略語「ふてほど」は同年の新語・流行語大賞になりました）．これは，昭和バブル期の男性教員である主人公が，2024 年にタイムスリップし，コンプラ時代の令和において「不適切な発言」を連発する，という作品です．私はこのドラマをみてはいませんが，昭和の香りを知る者としてそのギャップを理解できます．たとえば，部活中に水を飲んではいけない，教師や親からぶん殴られる，電車のなかで子どもの目の前でタバコを吸う，女性を侮辱し周縁化する言葉が公然となされる（たとえば，25 歳を超えた女性は「クリスマスケーキ」と呼ばれました），そうした時代がつい 30 年前，40 年前まであったわけです．そうしたかつての日本の状況に対して，おそらく令和時代に生きるみなさんは批判的な目を向けるでしょうが，おそらく私が出会ったムスリムたちも同様の意見をもつと思われます．彼女／彼らは――みなさんと同じように――，（多かれ少なかれ）民主主義国家のなかで生まれ育ち，グローバル経済に消費者・生産者として参与し，情報化時代のなかで世界中の多くの出来事や文化に影響を受け，学校や社会で女性と男性が対等な権利を持つことを学び，そして高等教育へのアクセスを当然視しています．そう考えるならば，現代に生きるわれわれは，「同じ文化を持つ」と称される「古き良き日本人」よりも，同時代の

ムスリムとの方がよほど多くの価値や経験を共有しているわけです．

3.「違い」との向き合い方

さて，結論となります．以上から言えることは，文化的な違いといったものはそれ単独ではたいしたものではないということです．その多くは「習慣」や「テイスト」の違いとして受容可能なものです．あるいは，そもそも「文化」とわれわれが同定するものは，固定化された本質を有するのではなく，時代や地域，社会集団の違いによって異なる姿をみせるものなのです．それこそが，1000 年以上前に始まった宗教が，それぞれの時代に適応するために多くの変化をともないつつ，今なお存続している理由なわけです．

また，「向き合うべき違い」といったものは，少なくとも学生にとってそれほど多くは存在しない点も重要です．みなさんが国内外の大学で出会うであろう人々の多くは，国籍が違っていたとしても，同じ時代に生まれ育った，同様の教育的・階層的背景をもち，技術・文明・情報を共有する人たちです．そう考えれば，違いよりも，共通性の方がずっと多いわけです．学生のみなさんには，文化的差異をことさら強調せず，それぞれの（小さな）違いを個性として理解した上で，さまざまな人と積極的にコミュニケーションをとり，関係構築をおこなっていただければと思います．それこそが，違い（多様性）を前提として形成されるグローバル化時代に求められる素養となるわけです．

私からの話は以上となります．

（社会学部教授）

2024. 11. 28（木）

自分自身の嫉妬心に向き合う

鈴　木　慎一郎

とっかかりの本

今回与えられたお題は「『違い』に向き合う」です．最近私が読んで面白かった本の話をしたいと思います．

こちらの『嫉妬論』という本を持ってきました．今年の２月に光文社から出た本です．副題には「民主社会に渦巻く情念を解剖する」とあり，本の帯には，「隣人，同僚，見知らぬ他人が羨ましい」，「嫉妬はしぶとい」といった刺激的な言葉が並んでいます．著者は山本圭さんという，立命館大学で現代政治理論を専門にされている方です．

私がなぜこの本に惹かれたかです．この方の仕事については以前からある程度存じ上げていて興味がありました．また，私自身が自分の嫉妬の感情に日々悩まされていて，それが非常に卑しい感情であると常々考えているということもありました．ただ，嫉妬の感情は決して私のみのものではないはずで，人間をより深く理解するためには，嫉妬についての理解を深めることが有意義だと考えたからです．

人間の条件

おそらく私のみのものではない，多くの人々に共有されているであろう，典型的な嫉妬の感情があります．たとえば，「あの人はサボっている」，「あの人は怠けているのに，頑張っている私よりも高く評価されている」，「頑張っている私よりも高い給料をもらっている」，などです．「あの人は私よりも周りからちやほやされている」や「人望が厚い」といった感情もあります．近年はソーシャルメディアが私たちの生活で日常的なものになっています．ソーシャルメディアの投稿を日々眺めていると，「あの人はいつもきらきらした生活を送っている，それに対して私自身の日常は何でこんなにつつましいのか」，「あの人はこんな立派な家に住んで，立派な車に乗っている」などの感情が湧いてきます．

これらは私的でプライベートな感情のみではなくて，嫉妬が社会的な現象になっていることもあります．近年，実際に社会の中では，女性や障害者や非白人が受けてきた差別の是正を目的とした制度への批判が起きてきており，また日本では生活保護受給者に対する批判もみられます．何らかの新しい制度が批判されるときに，「その制度はマイノリティーを優遇してしまっている」との理由が挙げられることもあります．嫉妬の感情は現実に，集合的なものとして立ち上がってきてい

ると言ってもよいと思います．先日のアメリカ合衆国大統領選挙におけるトランプ氏の勝利に関しても，その要因として，マイノリティーに対する差別を是正しようとする取り組みについて，それらをねたましく思うマジョリティー側の感情があったのでは，という分析もありました．

このような極めて人間的な感情と言える嫉妬について，著者の山本圭さんはさまざまな分野の文献を検証しながら論じていらっしゃいます．哲学や政治学，法学や思想史，さらには社会学や社会心理学，そして文化人類学などです．ここの社会学部に以前にいらっしゃった高坂健次先生や，現在いらっしゃる石田淳先生のご研究なども，参照されています．そうした検証作業を経ながら山本さんが述べるには，結局のところ嫉妬は，怒りや悲しみという非常に人間的な感情と同じように，人間である以上は消え去りはしないある意味で人間の条件である，とのことです．

従って，私たちとしては嫉妬と向かい合ってそれとうまく関わっていくしかありません．あるいは私自身の言葉に言い換えると，嫉妬と「だましだまし」付き合っていくことが重要です．この本の結論の一つを端的にまとめるとすれば，そういうことになります．もちろんそのことだけを主張しているのではなく，嫉妬に関してさまざまな方面から豊かに論じている本ですので，私はぜひ皆さん自身にこの本を手に取って読んでもらいたいと思います．

嫉妬と付き合っていく「コツ」

私が特に感銘を受けたのは，この本のエピローグの部分です．嫉妬との関わり方，嫉妬のコントロールの仕方が述べられた部分が，私にとっては非常に面白く読めました．山本さんは，実際に私たちがいかに嫉妬をコントロールすればよいか，コツのようなものをいくつか挙げていらっしゃいます．３つに整理してみます．

１つは社会のレベルでのコントロールの仕方です．社会の中で，一元的な価値観に縛られるのではなくて多元的な価値観を許容するようにすることです．それによって，ある次元におけるある人の位置付けが低かったとしても，その人が他の次元では挽回できる機会がより多く保障されます．それによってその人の自尊心やプライドは保たれることでしょう．

２つ目は，個人のレベルで嫉妬をいかにコントロールするかという話です．多くの芸術家は，自分自身を徹底的に見つめて作品づくりに没頭します．芸術作品とは絵画や小説でもよいし，芸術家にかぎらず，研究者であれば論文や著作でもよいと思います．ただし，自分自身を見つめて徹底的に作品づくりに没頭するというこの方法に関して，山本さんが注意点として述べていることがあります．つまりこの方法は，自分がどれだけいい作品を世に出せたかというような，芸術家同士のさらなる競争や嫉妬心を生み出すおそれもある，ということです．

３つ目は，他者と自分とを，中途半端にではなくて徹底的に比較してみることです．嫉妬をコントロールする方法として山本さんが挙げているもののうちで，私はこの方法に最も強く興味を覚えました．自己と他者との比較に関して，多くの自己啓発本が論じるのは，他人と自分を比較しなければ嫉妬から解放される，ということです．しかしこれには

無理があります．なぜなら人間は基本的に社会的な存在であるからです．いっぽう山本さんは，むしろ徹底的に他者と自分とを比較することが嫉妬をコントロールする一つの方法であるとしています．その部分を同書の243〜244頁から引用します．

> 妬ましく思う優れた隣人をよくよく観察すると，思いもしなかった一面が見えてくるものだ．当たり前だが，完璧な人間などそうそういない．そのような意外な事実が目に入れば，あなたの嫉妬心もかなりのところ和らぐはずなのだ．比較をやめられないならあえて徹底してみること，逆説的ではあるが，これだけが嫉妬という怪物を宥める確実な方法であるように思われる．

つまり，自分にとってねたましく感じられる他者のことを，さらによく知ろうとしてみるのです．もしその他者が身近な人物であれば，一方的に観察するのみではなくて多少は言葉を交わして，相手の日常についてもう少し知ろうとしてみることが重要です．

万能策はない

ただし山本さんは，嫉妬をコントロールするためのこれらの３つの方策を挙げた上で，いずれも万能な解決策ではない，とも述べています．私もここまで読んで，結局はやはり嫉妬を「だましだまし」なだめていくしかないと思いました．

本日のお題としていただいていたのは「『違い』に向き合う」でした．このことは私たちにとって，自分自身の嫉妬心と向き合うことでもあると言えそうです．

（社会学部教授）

Ⅴ．定年退職者による
最終チャペル講話

2024. 12. 4（水）

私の研究の根底にあるもの：人間とは何か？

野　瀬　正　治

はじめに（研究の出発点）

本日は，このような機会を頂き誠に有り難うございます．私が関学に着任したのは2001年４月で，今年で24年目になります．優れた研究環境を与えて頂き感謝に堪えません．それだけに，本日は，「これまで一体どう向き合ってきたのか」を問われているような気がしております．

私のいまにつながる研究の出発点となったのは，高校の時に遡ります．そこに至るのは，すでに幼少の時に始まると思いますが，思い出される意識としては，高校の時の，「人間とは何か」，という問いでした．

大学になると，人間とは何か，という問いの答えは普遍的に答えがひとつあるというものではない，と思うようになりました．先人たちの取り組みを学んでいると「人間とは何か」の問いへの答えは，先人それぞれの領域で，それぞれの答えがあるような気がしたからでした．そういう意味では，私にとって，「人間とは何か」は，個人と集団の関係において，「人間は個を認識しながら協働する生き物だ」ということになります．今は，端的に表現できるようになりましたが，当時はそのように簡潔に認識はできずに，むしろ，個人と集団の関係への疑問のなかで，人間への強い関心に支えられて暗中模索しながら進みました．「人間とは何か」を考える時，個人と集団との関係はどうなっているのだろうか，その疑問とそれを知りたいという気持ちにかられて取り組みました．

これまでの軌跡

その知りたいという気持ちは，大学では，実際に経験することで何かが分かるのではないか，と思い，集団スポーツのボート部を体験しようと考え取り組みました．ローイングボートに引かれたのは，上から見るとシンメトリーできれいだと思ったことと集団スポーツの典型とされるボートで，今，申し上げたように実際に個人と集団の関係を体験すれば，そこから何かがわかるのではないか，という気持ちからでした．

人間とは何か，という問いが，個人と集団の関係への疑問と強い関心になり，集団スポーツのボートをとおして個人と集団の関係について，実際に考えることから取り組み始めました．確かに，当時の集団スポーツボート部の生活での経験により，「協働」を具体的にイメージできるようになったような気がしています．

社会に出る時，この「人間とは何か」の問

いは，集団スポーツボートという狭い枠から人間のいとなみや人間集団の行動への関心となり，就活では，それに関係する仕事についてさらに取り組みたいと考え，人間模様が強い「工場の労務管理」の仕事を選びました．また，同じ集団スポーツの協働でも，社会人スポーツのボート部と学生スポーツのボート部では集団のあり方は同じなのだろうか，と疑問に思ったので，実業団でのボートの協働を経験し，その違いを知りたくなりました．いずれも「人間とは何か」の問いからの具体的な取り組みでした．これを今，一口で言えば，「人間とは何か」を，職場や企業，あるいは実業団スポーツの協働について体験し，そこから感じ取りたいという強い気持ちに導かれて取り組みました．

当時の文系の就活も今と同じで職務を決めてその仕事に就くことができるのはほとんど稀な時代でしたが，幸いそれも同時に実現することができました．

実社会での経験による「人間とは何か」の模索は，その後，経験の領域から，体系的，概念的な領域にかわり，組織・集団と個人との協働について，考えるようになりました．現場で取り組むことから，しだいに研究者として取り組むというスタンスに変わっていきました．最初に研究者の肩書を持ったのは，シンクタンクの研究員というステータスでさらに主任研究員へと進みました．そして，博士号取得への取り組みをとおして，研究論文や単著として，より明確にまとめることができるようになりました．

こうした私の研究の基礎には，人間とは何か，の問いがあり，今，それは，冒頭にも述べましたが，人間とは認識しながら協働する存在である，と答えることができるようになりました．

先人の捉え方（人間とは何か）

人間とは何かについては，多くの思想家や研究者が示唆を残しています．例えば，アリストテレスは，人間を「ポリス的動物」として捉えています．彼は，ポリスをとおして人間の特徴を政治の領域で論じています．それは私の領域で言えば，人間が協働する存在であることを指摘していることであります．本質的に人間は，協働して実践をする存在であり，その捉え方は，どのような領域かにより異なり，アリストテレスは，ポリスを構成する人間を政治という専門領域において論じました．また，チェスター・バーナードが機能組織集団における人間を論じる時には経営学の領域になるのであろうと思いますし，ゲオルク・ジンメルが個人と社会を論じる時には社会学の領域になるのだろうと思います．しかし，学問領域が異なっても，アリストテレスが，人間をポリス的動物というとき，それは，機能組織集団の組織均衡における人間とも共通しています．組織均衡とはバーナードの言葉であります．いずれの基礎にも，協働する人間があると感じるのです．

しかし，その協働は簡単ではなく努力しないと実現できないことを経験的に知りました．また，概念的には，ジンメルやラルフ・ダーレンドルフそしてバーナードから，その難しさを学びました．アリストテレスの協働とは結果は同じでも，ジンメル，ダーレンドルフそしてバーナードの考え方とは違うことも知りました．すなわち，ジンメルやダーレンドルフは，協働を対立紛争の克服により捉えますが，アリストテレスは理想として協働

を捉えています．

個人の自由や成長が社会の中で制限されても，他者との協働によって発展できるとするアリストテレスは，個人と社会の関係が調和して相互に成長する理想を追求していますが，ジンメルは，個人の自由や独自性と社会の規範が対立する現実から，個人が社会と対立しながらも，自己を確立して協働されると考えます．そして，ダーレンドルフは，社会を変化と対立の場として捉え，個人の自由や成長は，制度や社会の変革をとおして協働が実現されると考えます．

アリストテレスが調和的な協働を追求し，それに対して，ジンメルは個人と社会の緊張関係の上に協働が行われ，バーナードは組織均衡により協働が実践されると考えます．そして，ダーレンドルフは対立と変革を通じた新たな関係構築により協働がなされると考えています．個人と集団との協働のあり方を詳しくみれば違いがそこにはあります．

結びに代えて（私の捉え方）

私は，先にも述べましたが，人間は，「個を認識しながら集団との関係において対立を克服して，協働する存在」，であると感じています．そしてこの現時点の結論は，過去から今日までのわたしの研究の軌跡でもあります．

学生時代や社会人になった頃の若い時の実際の現場での経験をとおして，個人の認識のあり様が協働の基礎になっていることを経験しました．そして，個人がどう認識するかが協働の基礎にあることを悟りました．それは後で学んで知った社会構築主義や社会構成主義と同様に，人の認識が基礎であることを意味します．もっと端的に言えば，意味をどう理解するか感じるかが協働への関わり方に反映されます．意味の認識こそがすべての協働の核であるといえます．

先ほど，チャペルの始めに打樋先生が，新約聖書コリントの信徒への手紙の引用をなさいました．私は F 号館の入り口に掲げられている，その言葉を読み，ここ 20 年ほど感銘を受けております．そこには，先ほど，打樋先生からお話がありましたように，「わたしたちは見えるものではなく，見えないものに目を注ぎます．見えるものは過ぎ去りますが，見えないものは永遠に存続するからです」と書かれています．授業で教室に向かい入り口にさしかかると見過ごすことはできず，なぜ，「見えないものは永遠に存続する」のかを自問自答し，いつしか私は人間が認識する「意味や価値」がそうさせる，と思うようになりました．人間は，「意味や価値」をどのように感じるか，すなわち，人間は，「意味や価値」に共感する存在なのだと思います．そして，「意味や価値」への共感が，協働の核でもあるとも思います．

私は，これまでに論文や本を書いてきましたが，その根底には，文化的，社会的な存在である人間は，個も含めて認識をする存在であり，だからこそ，対立を克服し協働できる存在である，との人間観がいつも根底にあります．

本日は，チャペルの機会を頂いたことに深く感謝するとともに，今日まで人間とは何かを考える，優れた環境を与えてくださったことに心から感謝を申し上げます．本日はどうも有り難うございました．

（社会学部教授）

2024. 12. 5（木）

モンパルナスの日々ー４人の女性たちの思い出

荻　野　昌　弘

アブラハムの子，ダビデの子，イエス・キリストの系図.（・・・）
バビロンへ移住させられた後，エコンヤはシャルティエルをもうけ，シャルティエルはゼルバベルをもうけ，ゼルバベルはアビウドをもうけ，アビウドはエリアキムをもうけ，エリアキムはアゾルをもうけ，アゾルはサドクをもうけ，サドクはアキムをもうけ，アキムはエリウドをもうけ，エリウドはエレアザルをもうけ，エレアザルはマタンをもうけ，マタンはヤコブをもうけ，ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた．このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった.
こうして，全部合わせると，アブラハムからダビデまで十四代，ダビデからバビロンへの移住まで十四代，バビロン移住からキリストまで十四代である.
（マタイによる福音書　１章１節，12-17 節）

私は春学期にも１度こちらでお話をさせていただきました．その時に，私が高校を出てすぐにフランスの大学に行ったのですが，その理由について，自分でもよく分からないと話ました．今日は，ある意味でその続きで，フランスで出会った方々について話したいと思います.

先ほど読んでいただいた『マタイによる福音書』では，冒頭にイエスが生まれてきた系図について書かれています．ユダヤの男系社会の中で，マリアが登場するまでに４人の女性が出てきます．「闇の中」という言葉が，先ほどのお祈りの中にありました．この４人は，いずれも闇の中にいる女性です．イエスが生まれるまでに，この４人が出てくることを考えると非常に興味深いです．そのことについては後で話します．フランスでどのような人に出会ったかということで，同じように，４人の女性の話をしたいと思います.

同じアパートに住む４人の女性たち

私はパリのモンパルナスに６年間住んでいました．モンパルナスは，パリの南にある中心的な場所です．私が生まれた東京の新宿と同じように，多くの人が集まる繁華街です．私は，モンパルナスの地下鉄の駅から，歩いて 30 秒の場所に住んでいました．普通は外国人が住むことができない場所ですが，私は偶然見つけることができたのです．１階

の全く日が当たらないワンルームマンションでした．5 階ほどの建物で，私の部屋の前に 1 人の女性と，他にも 3 人の女性が住んでいました．私がいた 6 年間で，同じアパートに住む 4 人の女性と時々話す機会がありました．先ほどの系図の 4 人と偶然数字が合致しています．

フランスで最近，首相の内閣不信任案が国民議会で可決されましたが，もう一つ，上院，あるいは元老院と訳されているセナという議会がリュクサンブール公園にあります．私の部屋の前に住んでいた女性はセナの役人でした．通常，そのような人は日が当たらない 1 階には住みません．しかし，その女性は足が不自由で車椅子を使っていたのです．車椅子で部屋を出て，マンションの前からタクシーで議会に行く生活をしていました．

車椅子の彼女がなぜ元老院で働くことができたのでしょうか．元老院はフランス革命の後，19 世紀に議会として使われ始めた建物で，それ以前は宮殿でした．19 世紀に，非常に有名な作家で議員でもあったヴィクトル・ユゴーという人がいました．『レ・ミゼラブル』を書いた人です．ヴィクトル・ユゴーは足が不自由で，議会はすぐにエレベーターを作ったのです．足が不自由でも働ける環境が整えられていたため，彼女も働くことができました．

隣同士のため，彼女とはよく話をしていました．そして，私が日本に帰ることを話すと元老院の中を案内してくれました．通常，元老院の中を見ることはできないため，非常に貴重な体験ができました．それが 1 人目です．

2 人目はルーマニア人の女性です．ルーマニアから亡命してきて，3 階に老夫婦で住んでいました．この後 3 人目として出てくる女性に，亡命者なので大変苦労して今に至っていると聞きました．時々擦れ違った際にあいさつする程度でしたが，非常に穏やかな方でした．これが 2 人目です．

Addiction

3 人目は，おしゃべりが好きなアルコール中毒の女性でした．パリの中心街で，マンションの周りには多くのカフェがあります．朝の 9 時頃にカフェに行くと，必ずその女性がカウンターでワインを飲んでいました．これは彼女の日課です．時々，偶然通りすがった時に彼女が私のことを見つけて，「一緒に飲もう」と言ってきます．朝からワインを飲むと一日中ふらふらしてしまうため，それほど飲みたくありません．しかし，付き合いで朝の 9 時から飲むこともありました．その時に彼女がいろいろな話をしてくれました．彼女は，かなり資産のある寝たきりの老人の面倒を見るために，そこに住んでいると言っていました．実際に法的な婚姻関係があったかどうかまでは分かりません．朝からワインが飲めるということは，一切働いていなかったと思います．この女性が 3 人目です．

4 人目は，私が最も迷惑を掛けられた麻薬中毒の女性です．今となっては非常に懐かしいです．私はアジア人のため麻薬を持っていると思われて，「あなたは赤ワインを持っているか」と聞いてくるのです．赤ワインは俗語で，フランス語で大麻のことです．もちろん持っていないため断っていました．しかも，夫はほぼ家にいません．泥棒のようなことをしていて，捕まって刑務所にいるのです．その代わりにいろいろな男性が入ってき

ていました．この女性は，麻薬中毒のため，おかしな状態になってしまうことがありました．２階から飛び降りたことが１度あったため，窓には鉄格子が付けられていました．戻ってきた夫が再び盗みを働いて，警察が来る場面にも出くわしました．外が大変騒がしくなって，警察官が入り込んできて夫を逮捕したのです．

麻薬中毒の女性と泥棒のカップルは２階に住んでいて，夜中でもうるさくて寝ることができませんでした．何度も文句を言いに行くと，２人とも意外に丁寧で美しいフランス語を話すのです．夫の姓は，De Loménie ドゥ・ロメニでした．ドゥ・ロメニ家は代々続く大貴族で，歴史にその名が出てくるほどです．彼はその末裔（まつえい）だったため，フランス語自体は正統派で，非常にきれいでした．フランスでは，階層によって，話すフランス語が大きく違うのです．大変美しいフランス語を話すけれども泥棒でした．

実際に住んでいた時は，「こんなものか」と思っていました．しかし今は，わずか５階建ての 10 世帯ほどしかないアパートに，さまざまな人が住んでいたことを改めて思い出します．

『マタイによる福音書』と４人の女性たち

『聖書』に出てくる４人の女性の話に戻ります．闇と言えるかは分かりませんが，私が出会った４人のうち，２人はアルコール中毒と麻薬中毒です．もう１人は亡命者で，もう１人は障害を持っている女性です．そこに住んでいた４人の女性は，全員がそれなりに問題を抱えながら生きていました．その中で６年間を過ごしたことは，私にとって非常に良い経験でした．その時に社会学の博士論文を書いていましたが，その中で４人の女性たちに触れているわけではありません．しかし今は，周辺的な部分に生きている女性たちの存在があって，ある意味で社会学の論文を書けたのではないかと思っています．

『聖書』においても，４人の女性はそれぞれがいろいろな問題を抱えていました．時間がないため話すことができませんけれども，調べてみると面白くて非常に興味深いです．最初に出てくるタマルは，死んだ夫の父親と関係を持って子どもを産みました．その意味で『聖書』は，どちらかといえば社会の中心ではなくて，周辺部にいる人たちを描くとこから始まっていて，そこが非常に興味深いのです．実は，神話的な世界と社会学は大きく関係していると感じています．私は定年を迎えますが，これからそのようなことを少し研究したいと思っています．

（社会学部教授）

2024. 12. 10（火）

学びの在り方について

吉 田 寿 夫

はじめに

これが私にとっての最後のチャペル講話になります．最後まで傾聴してもらえたら幸いです．

さて，最後ということで，どのようなことを話そうか迷いましたが，「これからの大学生活において，どのようなことを自分の中に育んでほしいか，さまざまなことを学ぶ際にどのようなことを重視してほしいか」といったことについて，「青年の主張」ならぬ，「老人の主張」をさせていただくことにしました．そして，最初にその内容を端的に言ってしまうと，「学びの過程の重視」ということと「不合理についての学びの重視」ということになります．いずれも，これまでいろいろなところで書いたり話したりしてきたことですが，今日ここにいる人の多くにとっては初めての内容ではないかと思います．

学びの過程の重視

それでは，まず，「学びの過程の重視」ということについて話します．

唐突ですが，卒業論文を作成するための研究のような学問的な探究活動だけが探究ではないのであり，意識的に行なっているか否かはともかくとして，私たちは，日常の種々の場面で適切であろう意思決定をしたり妥当性が高いと言えるであろうなんらかの主張をしたりするために，「生き方や社会の在り方などに関する考え」といった価値観が強く関わることを含む，さまざまな事柄について探究をしている（ないし，探究をする必要性が高い状況に遭遇している）と思います．そして，大学卒業後の長い人生においても，学問的なことに限らない，さまざまなことに関して，探究することが求められると思います．

以上のことから，私は，「教育を受ける中で，良い結果を出す，とか，良い結果や高い評価を得る」ということも大事だとは思いますが，それ以上に，「良い結果を出せるようになる（すなわち，これからの人生において良い結果を得るために必要であろう態度や知識やスキルなどを習得し，成長する）」ということが大切だと思っています．

心理学用語の中に，習得目標と達成目標という言葉があります．習得目標というのは，学習に際して，自分の能力を伸ばすこと・自分を成長させることに主眼を置いた目標であり，達成目標というのは，学習に際して，良い結果を出すこと・良い結果や高い評価を得ることに主眼を置いた目標です．とかく私たちは達成目標に主眼を置きがちだと考えられ

ますが，習得目標のもとでの学習の方が，困難なことに挑戦しようとする傾向が強いとともに，失敗を嫌がらない傾向が強いこと，そして，このようなことは，学校教育における学習だけに当てはまることではないことなどが，それらを例証しているデータに基づいて論じられています．すなわち，「一般に習得目標のもとでの学習の方が望ましいと考えられる」ということです．

ただし，達成目標を抱くこと（すなわち，良い結果を求めること）は自然なことであり，達成目標を抱くことを否定しているのではありません．あくまで，「達成目標ばかりに囚われると，成長につながりにくいとともに，学習が面白いと思えるものになりにくかったり，しんどい状態になりやすかったりする」ということです．

ちなみに，朝日新聞の記事によると，メジャーリーガーのダルビッシュ選手は，昨年行なわれた WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）という野球の国際大会に際して，「日本の選手たちとしっかり情報を共有して，お互いに成長していけたらいい．勝ち負け以外にも，そういうことをしたい」と言ったそうです．私は，「なかなかー」と感心しました．

それから，良い結果を得るために必要であろう態度・知識・スキルなどを習得して成長するためには，「“探究に関わる種々のことをどのように行なったら良いか”という，過程についての学び」が大切になると思います．言い換えれば，「答えを知るのではなく，より良い答えを探究するためにはどう考えたり，どう行動したりしたら良いかについて考え・知ることが大切だ」ということです．

そして，具体的には，まず「考え方について考えたり話し合ったりしてから考えること」，もう少し具体的に言うと，「種々の場面において“どのようなことについて，どのような順番で，どのようなことに留意しながら，考えるか”といったことについて考えること」が重要になると思います．また，「話し合い方について考えたり話し合ってから話し合うこと」や「なんらかの文書を作成する際に，推敲の仕方について考えてから推敲すること」などを意識することも重要になると思います．さらに，「(そもそも) 何のために，どのようなことについて，どのように学ぶか」，「どのような知識を，どのように習得したら良いか」などという，習得しようとする知識の内容や質，習得の仕方といった「学びの在り方」についてあらたまって考えてみることも重要になると思います．

以上に述べたことを要約すると，「学ぶ過程についてあれこれと考えながら，学ぶ過程ないし探究する過程について学ぶことを重視してほしい」ということです．

不合理についての学びの重視

次に，主張したい２つ目の事柄である「不合理についての学びの重視」ということについて話します．

残念ながら，私たちの思考やそれに基づく行為には，不合理な面が多々存在しています．たとえば，少数の（ないし，偏った）事例に基づいて，本当はそんなに簡単に判断を下すことはできないにもかかわらず，「一般に“〜だ”と言える」などと，行き過ぎた不用意な推測や主張をしてしまうことである「少数事例の過度の一般化」や，自身が抱いている仮説（や信念や期待など）に沿った

（それらが維持ないし強められることにつながる）偏った情報探索や情報処理がなされることである「仮説確証バイアス」と呼ばれる不合理は，日常のさまざまな場面で生じています．

ただし，これらは，私たちにとって「自然な性（さが）」と言える，避けがたいものであり，たとえば，「少数事例の過度の一般化」がなされるのは，限られたことしか経験することができない中で世の中を（「個別から一般を推論する」という）ボトムアップで探索的に理解していかざるを得ない私たちにとって，致し方がないと言えるであろう必然的なことだと思います．

それから，「日常，見聞きした現象や，データをとって分析して見いだされた現象がなぜ生じたのか」という，それらの現象の生起に関わっている因果関係を短絡的に決めつけてしまいがちであることや，「あることをするか否か」や「複数の選択肢の中のどれを選ぶか」といったことに関する意思決定が一面的ないし短絡的になされがちであることなども至る所で見られます．また，「“必ずしもそうとは限らない”ないし“そう思う根拠が認められなかったり，極めて脆弱である”にもかかわらず，“〜でなければならない”とか“〜してはいけない”などと思ってしまっている」という，非合理的信念と呼ばれる思い込みも遍在しています．

さらに，これまた残念ながら，以上のことは私たちのような「研究者」と呼ばれている者の研究活動における思考および行為においても同様に遍在しており，学術書や学術雑誌に掲載されている論文などに書かれていることにも批判すべき点は多々あります．もっと強く言えば，「問題点がまったくない，完全だと言えるような研究は存在しない」と私は思っています．

なお，以上のような不合理だと言えるであろう思考および行為は，個々の研究者の研究を行なう際の姿勢や有している知識や能力などの至らなさに起因している面もあるでしょうが，私たち研究者も，人間である以上，自然な性である不合理から免れることはできない存在であり，「そもそも非合理は不可避である」と言える面もあると思います．もちろん，研究者たる者，自然な性に抗って不合理な面を極力少なくする努力を怠ってはいけないとも思います．

以上，「否定的な方に偏った，ひねくれた考えだ」などと思われたかもしれませんが，「世の中には，皆さんがなんとなく思っている以上に，不合理な思考や行為に基づく，妥当性が低い，もしくは，根拠が脆弱である，主張や言説が遍在している」と思います．ですから，自分がそのような妥当性が低い主張を不用意にしないようにするためにも，また，他者の不用意な主張を無批判に受け入れてしまわないようにするためにも，「私たちは，どのような不合理な思考や行為をしがちであるか」ということに関するさまざまな知識を習得し，それらに基づいて，自他の思考（特に，自分の思考）に対して批判的に吟味することが重要になると思います．言い換えれば，「自身の考えを正当化する姿勢や正当化するための知識やスキルばかりを身につけるのではなく，自身の考えを疑う姿勢や疑うための知識やスキルを身につけることが重要である」ということです．

「老人の主張」は以上です．特に 2 つ目のことは，具体例を交えたていねいな説明をす

ることができなかったので，わかりにくかったかと思います．ごめんなさい．

最後まで熱心に聴いてくださったように感じています．ありがとう．

（社会学部教授）

2024. 12. 11（水）

チャペル講話を語る意義とは
ー最終講話で考えたこと

三　浦　耕吉郎

「深い闇のさなかに」

以前のチャペルではもう少し長く話せましたので，うっかり今日も 16 分から 17 分バージョンを用意してきました．実際には 13 分間ということで，最後まで話せるかは分かりませんが，とにかく急ぎましょう．まず，最初に驚かされたこと．それは，たった今歌われた聖歌の題名「深い闇のさなかに」が，まさしくこれから私が話そうとする内容をあまりにもぴったりと言い当てていたことです．この歌を選ばれた打樋先生の直感はさすがですね．

チャペル講話と研究のあいだで

さて，私自身，これまで何回かチャペル講話を行ってきました．今日は，その中で特に印象に残っている出来事についてお話ししたいと思います．具体的には 8 年前の，この『2016 年度チャペル講話集』に収録された，2016 年 10 月 27 日木曜日の講話についてです．

じつはこの日の講話で，私はある種の，自身の黒歴史をしゃべっています．それは，こういう場でないとなかなか口にできない内容なのですが，それがなんと今年の夏に刊行された私のこの本のなかに，数ページにわたって引用されたのみならず，この本の主題にかかわる重要な部分を構成することにさえなっているのです．

……で，この本ですが，薄緑色のカバーだけでも見たことがおありではないかと思います．つい最近まで（もしかすると今も）図書館の一階ホールに展示されていましたから．

題名は，『自然死（老衰）で逝くということ』（新曜社）．重度の認知症だった私の父親が，「わたしの家」というグループホームで 99 歳で亡くなるまでの，6 日間の看取りの記録です．父が亡くなったのは 9 年前の 2015 年 12 月 12 日，奇しくも明日が命日にあたります．父は，その頃にはすでに車椅子生活でしたが，結構よく食べて元気で，寝込んだのは最後のたった 6 日間のみでした．そのような死に方はとくに病因がないという意味で，医学的には老衰死と診断されます．私はそれをもっとポジティヴに自然死と呼んでいます．

それで，2016 年 10 月のチャペル講話で話し，この本に引用した例の黒歴史ですが，それは本書の中のコラム「だんだん足取りが重くなる」のなかで次のような体験として描かれています．

私の黒歴史と「死ぬ権利」

「（父が亡くなる）最後の数年，私にはグループホームに入っている父に会いに行くのがおっくうになった時期がありました．ホームまでは，武蔵野の面影を残す風景の中を駅から 20 分ほど歩きます．私はその景色がとても好きで歩くのも全く苦にならなかったのに，だんだんと施設へ行く足取りが重たくなり，あるとき，できることなら行きたくないと思っている自分に気づいたのです．なぜかというと，父が私の言ったことに相づちを打ってくれたり，言葉でなくても表情で反応を示してくれているときはまだ良かったのです．ところが，父がだんだんと反応を示さなくなっていったときに，今日もまた，私はまったく反応を見せない人に向かって一方的にしゃべって帰ってくるのかと，内心なんとも虚しく感じるようになったのでした……」と，そこでは，そんな書き方をしています．

実際に施設に訪ねて行っても，面会して 5 分もするとそこを出て帰る理由を考え始めていました．それが私の黒歴史です．大した黒歴史ではないなと思われる方も多いと思います．じっさい，私もこの出来事を誰にも話しませんでしたし，自分でも大したことではないと思い込もうとしていましたので，この出来事は普通なら無かったことになるはずでした．ところが，それを容易に忘れさせてくれない痛ましい事件が，2016 年 10 月のチャペル講話の 3 カ月前，つまりは父の亡くなった翌年の 7 月下旬に起こってしまったのです．もしも，この事件がなければ，恐らく 10 月 27 日のチャペル講話の中身は全く違ったものとなったでしょう．というのも，その時のチャペル講話の題は，まさしくその事件，すなわち「相模原障害者殺傷事件について考える」だったのですから．

相模原障害者殺傷事件については，容疑者が，障害者の人たちの施設で事件を起こした動機を次のように語っています．「重い障害を持っている人たちにとって，毎日生きていく意味はあるのだろうか．それがないのであれば，いっそのこと楽に死なせてあげるほうが本人にとっても幸せだ」というのが理由でした．犯人はそうした動機の下に 19 人を殺害し，25 人に重傷を負わせる事件を起こしたのです．

チャペルで，当時の私は以下のように話しています．「これは異常な行為だと言わざるを得ませんけれども，異常な人がやった行為である，自分たちとは関係ない人の犯罪だとは私には思えません」．人ごととは思えない理由としては，私が先に読んだくだりにあった「だんだん足取りが重くなり，父のところに面会に行ってもこの人と向かっている自分に全く意味が感じられなくて，早く帰りたくなる」といった感覚がそれです．そして本には引用しなかったのですが，チャペルでは，さらにそれに続けて自分の心の声を告白しています．

「自分自身も，いつ認知症になるか分からない．私の祖母も認知症でしたし，父も認知症，いずれは私もという覚悟を徐々にしています．そんななかで一体，どんな思いが頭をよぎるかというと，あのようになるまで生きたくないなと正直なところ思いますし，あのようになるくらいだったら，いっそのこと死んでしまいたいという気持ちが心のどこかにありました．もし安楽死という権利があったとしたら，それをするか，しないかは別にしても，その選択肢が私の頭をよぎると思いま

す」.

「安楽死，あるいは，尊厳死もそうですけれども，これらは死ぬ権利に関わる話です．それを人に対して施す場合，実はそれを施す人たちは善意から行っていることが恐ろしいことなのです．先の容疑者も衆院議長に手紙を書きましたが，善意に満ちあふれていて，善意に基づく殺意がそこにはみなぎっています．そして，人に対して施すから殺意ですけれども，その殺意が自分に対して向かうと自殺です．自分に対して決定する場合，安楽死も基本的には自殺の一種だと私は思います．つまり，容疑者が思ったことと私の心の中をよぎった思いが，決して別のものではないという部分が私にとってはすごく重くて，そしてまた，まだ解決がつかない問題です」と，2016 年 10 月の私は言っています．

終わらない煩悶

もはや現在の私には，今読んだような生々しい思いを直接口にすることはできませんし，このような文章を書くこともできません．（それ故に，8 年前の文章を読ませいただいたのでした……）．とはいいながら，現在の自分がこの「8 年前の私」の考えをはっきりと克服できているかと問われると決してそうではありません．この本は書いたけれども，自身が安楽死とどのように向き合うかという点については，依然として宙ぶらりんの状態にいるとしかいえないのが現状です．だからこそ，少なくとも犯人の主張をちゃんと批判するために，この本を書くことを思い立ったといってもよいかもしれません．

また，翌年の 2017 年には，『安楽死で死なせて下さい』というベストセラー本が出ました．この本では，著者が安楽死で死にたい理由として，「もし認知症になったら」という仮定があからさまに掲げられていました．それに対して，せめて，安楽死ではなく自然死での逝き方があることを，まずはとにかく広く認識してほしいという思いがあったのもたしかなことです．

しかし，私自身が安楽死を選ぶかもしれないという可能性については，2016 年以降この本を執筆してきたにもかかわらず，上で述べた以上のことは未だに展開できていません．2016 年の自分から見ると，「おまえはこの 8 年間で一体何を考えてきたんだ」と問われても仕方のない中途半端な状態ですが，とりあえずの結びとして，今の私はそのようなところにいる（／おらざるをえない）ということを最後に告白して，今日の講話のまとめとさせていただきます．

なお，少々急ぎすぎたため，早く終わってしまいました．残りの時間で，打樋さんにお話したいことがあります．

関学社会学部に着任して最初の数年間は，チャペルで講話をするのはクリスチャンの先生方ばかりでした．それが任意になって，打樋さんが全ての教員に声を掛けるようになりました．それでも，私の考えとしては，チャペルとは何よりも神様とコミュニケーションをする場ですので，私は信仰をもっていないという理由から 10 年間チャペル講話を断り続けました．しかし，10 年ほどたって打樋さんと仲良くなって飲み友達になったために，酒の席で頼まれてうっかり請け合ってしまったわけです．おかげさまで，このような講話をする機会に恵まれました（笑）．

結局，嫌という気持ちは神様の存在を否定しているわけではなくて，私自身が大変な緊張感を持ってチャペルに臨んでいたというこ

とだと思います．もしかすると，私はクリスチャンの方のとは別種の緊張感を持ってここに立っているのかもしれません．でも，そのような場だからこそ，私にとって自身の研究を推し進めるきっかけを与えてくれた場としてチャペルがあったということを，感謝とともに最後に申し上げて終わりにいたします．長い間，ありがとうございました．

（社会学部教授）

Ⅵ. 学年度末にあたって

2025. 1. 9（木）

時間のはなし

島　村　恭　則

時間のいろいろ

チャペル最終日の今日は，時間の話をしたいと思います．今日は，今年最初のチャペルであるとともに，今年度の最後のチャペルでもあります．つい先日は，クリスマスとお正月でした．この時期は，時間に関わることを考えることが多いように思います．

さて，時間には４種類あると思っています．１つ目は一直線に進んでいく時間です．２つ目は繰り返される時間です．「1 年目，2 年目」や「春，夏，秋，冬」など，繰り返される時間，別の言い方をすると円環する時間です．３つ目は立ち止まる時間です．４つ目は白紙の時間で，何もない時間です．時間をその４種類に分けて話したいと思います．

直進する時間と円環する時間

まず，直進する時間です．常識的に，時間は逆戻りできません．時計は進んでいきます．この逆戻りせず，まっすぐ進んでいく時間が直進する時間です．それに対して円環して繰り返される時間というものがあります．たとえば，クリスマスや正月など，年単位で毎年巡ってくる，そういう時間の巡りが，円環する時間，回帰する時間です．毎年，同じように，クリスマスや正月が巡ってくる．クリスマス，あるいは正月から出発して１年という時が経過して再びクリスマスや正月を迎える．これは，つまり，クリスマスや正月に回帰しているということです．そして，この回帰はまた歴史的，あるいは神話的始まりの時点への回帰でもあります．例えばクリスマスは，イエス・キリストが生まれた時に回帰するのです．正月も，毎年新しい年が生まれているわけで，これはある意味，時間というものの始まりに回帰しているのです．

私たちは常識的に，時間は真っすぐ進むと思っています．しかし，かつては恐らく，回帰して繰り返される時間という感覚のほうが自然だったのではないでしょうか．そのように思う理由は，毎年の四季の巡りです．あるいは，四季がなくて，冬と夏しかない場所なら二季の巡りでもいいです．「冬，夏，冬，夏」や，「冬，夏」が，毎年やって来る．繰り返されるわけです．人間は，自然の中で農耕をしました．そこでは，四季や二季という自然の運行と人間の生活のリズムが対応したかたちで時間の回帰，円環が起きています．しかも，過去の始まりの部分まで深く回帰して，円環する．こういう時間感覚のほうが，直進的な時間感覚より普通だったと考えられます．ところが，近代では直進する時間が重

視されるようになりました．こちらのほうは，客観的，科学的な時間ということになります．

大学に入ると，入学した翌日にガイダンスやオリエンテーションがあって就職活動の話が突然出てきます．最近も行っているか分かりませんが，ポートフォリオで全てを蓄積して，「4 年間でこれだけ成長できるよ，それで就職するんだよ」と，真っすぐ……．右肩上がりという言葉があります．成長していくことが前提のグラフで，一直線に進化しなければいけません．途中で止まってはいけないと錯覚する方向付けが，世の中にも，また大学にもあります．あおられ続けて止まってはいけない．そういうのは，直進する時間の感覚と対応しています．

立ち止まる時間

３つ目は立ち止まる時間です．直進し続けると疲れてしまうため，所々で立ち止まって振り返る時間が必要です．恐らく，その時間が上手に取れないといろいろと生活面でバランスを崩してくると思います．チャペルはまさに立ち止まる時間です．一日のうちで，例えばこの時間にチャペルで立ち止まって２限の授業に行きます．それが重要で，振り返って心を静める時間が必要なのです．大学の創立以来，チャペルの時間は常に守られてきました．立ち止まる時間がきちんと用意されていることが関西学院大学の特徴です．まさに今がその時間です．

白紙の時間

もう１つは白紙の時間です．手帳には予定を書いていきます．予定が埋まらなくて，白い部分があることは良いことなのでしょうか．それとも悪いことなのでしょうか．白い部分が多いと，暇で何もしていないと思うかもしれません．しかし，むしろ何もない白紙の時間が重要です．その時間にはアルバイトなども入れません．全て埋めたがる人もいますが，白い部分があることで人生が充実するのです．

試験が終わって，４月まで約２カ月間の休みがあります．ちょうど今の時期です．私が大学生の時も，もちろんこの時期にアルバイトをしていました．おおむね夕方からだったため，昼は真っ白だったことが良かったです．ぼんやりすることも，本を読み続けることもありました．あるいは，予定とは別にあちこち散歩する時間がありました．そこでいろいろなことを考えることができたため，埋めなくて良かったと思っています．その当時も直感的に埋めないほうが良いと思っていましたが，今考えるとまさにそうです．

忙しいと，手帳に白い部分がなくなってしまいます．あるいは，たまに白い部分があると，そこに色を塗ってしまいます．空き時間がとれた，よかったと．白のはずですが，むしろ時間を確保するために赤くします．「白紙の時間ではなくて赤い時間なのでは？」とも思います．大学生の時は，多くの白紙の時間をつくることができます．「何でも埋めればいい」というものではないと思います．充実した大学生活を送るために，手帳を埋め過ぎて疲れてしまう人もいるかもしれませんが，むしろ，充実させるために白紙の時間を

大事にしてほしいと思います．

今日は，４種類の時間を思い付くまま挙げました．直進する時間，円環する時間，立ち止まる時間，白紙の時間です．社会に出ると直進する時間で精一杯で，立ち止まる時間がありません．円環する時間も，正月やクリスマスなどの時期が来ても，慌ただしくて，落ち着いて向き合えないことすらあるわけです．ましてや白紙の時間は取れなくて，赤く塗ってしまうほどです．非常に悲しいことです．

大学生は，白紙の時間を大事にしてさまざまなことを味わうことができます．この先，自由な時間が２カ月ほどあります．白紙こそが充実した時間だと考えて，全てを埋めずに，ぜひ良い春休みを迎えていただきたいと思います．また来年度にお会いしましょう．

（社会学部教授）

2024 年度　チャペル講話集

2025 年 3 月 25 日発行

発行　関西学院大学社会学部
〒662−8501
兵庫県西宮市上ケ原一番町 1−155
TEL（0798）54−6202

印刷　関西学院大学出版会

K.G.